

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY  
ANNUAL REPORT  
OF  
RESEARCH INSTITUTE FOR LINGUISTIC  
CULTURAL STUDIES

Vol.32      MARCH 2022

---

Contents

Hisayuki KAGEYAMA

Linguistic Behavior of University Students Seen in the Use of Social Media. [2]  
—The Conscious or Unconscious Use of Dialects—

Chiaki KISHIMOTO

Ascension of the Nature Studies in the Early New Education Movement in Britain  
Yoko YAMASAKI

Random Observations of Japanese Dialects  
—Centering around Kyushu and West Japan

Kiyotsugu SHIBATA

Names of Chinese People  
— An Introduction of Xiao Yaotian's *A Study of Names of Chinese People*

Kiyotsugu SHIBATA

An Analysis of the Vocabulary Used in TV Educational Programs for Elementary  
School Students

Mizuki Yamaoka

The Outline of Activities of the Research Institute 2021-2022

Editor's Postscript

武庫川女子大学

言語文化研究所年報

第三十二号

二〇二一

武庫川女子大学

言語文化研究所年報

第 32 号

2021

武庫川女子大学  
言語文化研究所年報  
第 32 号

目 次

玉井暲先生の近影

玉井暲所長のご退任を惜しむ 影山 尚之 1

SNS に見る大学生の言語行動 [2]

-- 方言の意識的な使用・不使用 -- 岸本 千秋 3

キーワード 言語行動 言語意識 方言 大学生 SNS LINE

イギリス新教育運動初期における「自然学習」の勃興

—社会改革と用語選択に着目して— 山崎 洋子 13

キーワード 自然学習, 新教育運動, 実物教授, オクタヴィア・ヒル,  
パトリック・ゲデイス, オープン・スペース, コモン,  
ナショナル・トラスト

方言雑考—九州、西日本を中心として 柴田 清継 41

キーワード 佐世保方言 長崎弁 肥筑方言「グッドバイ」ウ音便

「中国人のお名前—蕭遙天著『中国人名的研究』の紹介」

柴田 清継 59

小学生向け教育番組に用いられる語彙分析 山岡 瑞希 61

キーワード 語彙 教育番組 日本語能力試験

活動概要 73

編集後記 80

# 玉井 障 先生 近影



2021年12月25日（土）言語文化研究所フォーラム  
「言語文化と言語教育—文章読本を考える—」



2021年7月24日（土）言語文化セミナー  
「ラフカディオ・ハーンと浦島伝説」



2015年12月12日（土）  
言語文化研究所シンポジウム  
「言語文化の諸相：注釈・翻訳・翻訳語」

2014年11月18日（火）  
言語文化セミナー  
「若者言葉の変遷と死語予想」





# 玉井暲所長のご退任を惜しむ

影山尚之

「紳士」を名乗るにはさまざまな要件があるだろうが、玉井暲先生とお話ししているときにいつもそのことが浮かんでくる。誰もが敬仰する学識と品格に加え、柔和な表情で同僚・学生と接してくださるお優しさ寛容さ、講義や会話のなかにさり気なく差し挟まれるユーモア、紺色系のスーツに身を包んでお立ちになる端厳なお姿、どれもこれも紳士そのものだと感じる。羨ましく、ときに妬ましくさえ思う。大学は知識人の集う社会とは言いながら、これほどに総合的人格を備えた方は決して多くない。

戦後ほどない1946年に和歌山県にお生まれになった玉井先生は、母校の大阪大学文学部に長らく奉職されたのち、イギリス文学研究の方面の輝かしいご業績・ご経歴を携えて、2010年より武庫川女子大学にご着任くださった。まもなく文学部長・文学研究科長に就任、2014年からは言語文化研究所所長を兼務なさることになる。2020年3月にそれらの任をお退きになるまで、武庫川女子大学における教育・研究・管理・運営の最前線として、わたくしども後身をエネルギーに牽引してくださった。その目覚ましいご貢献に対して感謝の念を抱かない者はいない。現在もなお嘱託教授のお立場で大学院生等への指導にご注力いただき、折に触れて研究所の運営にもご助言を賜っている。突然に後任所長を襲うことになったわたくしにとっては、玉井先生の存在が頼りであり、お姿を拝見すると安堵し、暫くお目に掛かれない日が続くと不安でしかたない。

7年間の言文研所長ご在任中には、「言語文化研究所シンポジウム」「言語文化研究所フォーラム」ほかの行事の充実を図り、わけても「フォーラム」では神戸大学との共同研究を実現して学的水準の高い知見を学内外に発信してくださり、研究所のステージがぐんと高まったことを実感する。「シンポジウム」のテーマの切り口に選定された「ネーミング」はユニークであると

ともに親しみやすく、来聴者の好奇心を強く刺激した。その集大成となる論集『ネーミングの言語文化』が間もなく刊行の運びとなる。楽しみである。

周知のとおり言文研の活動の基盤は一貫して現代日本語研究に置かれているが、玉井先生のご尽力によって鮮やかにグローバル化の方向性が拓かれ、武庫川女子大学独自の新たな研究領域・手法を確立した。わたくしどもはそれを守り、育て、成果を世に問わなくてはならない。その重い責任を思うと、またしても不安を抑えられなくなって、学内に玉井先生のお姿を探す日々である。先生には、くれぐれも健康にご留意のうえ、もとより旺盛な探究心をますます持続してくださって、いつまでもわたくしどもをお導きいただきたいと切に願う。このうえない感謝とともに。

\*                         \*                         \*

ほんとうならば『年報』第31号をもって玉井所長ご退任記念号とするべきでした。ところが、新型コロナウイルス感染症の流行によって研究所の行事の大半が中止また延期となり、思うとおりの活動ができず、昨年(2021年)7月にようやくご退任記念講演(「ラフカディオ・ハーンと浦島伝説」)を行っていただくことができました。非礼を重ねましたことに改めてお詫び申し上げます。

# SNS に見る大学生の言語行動 [ 2 ]

-- 方言の意識的な使用・不使用 --

岸 本 千 秋

## 1. はじめに

本稿では、大学生の SNS 利用場面における方言の使用意識について考察を行う。近年、方言の使用については、ファッション的、あるいは、言葉遊び的な使用を指摘する論考が見られる。小林 (2004) は、若者の方言使用について「方言のアクセサリー化」という考え方を示した。「現代は、共通語が方言を引き立ててくれる時代」であり、「話し手の心情に関わる世界が方言の活躍の場」であるとし、共通語の中に感情系の言語要素として文末詞、感情語彙、程度副詞などをちりばめて使うことを指摘している。田中 (2011) は、「話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の「方言」とはわかりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「○○方言」を、その場その場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容にあわせて臨時的に着脱すること」を「方言コスプレ」と名付けた。これらはいずれも、方言を使用することや方言そのものが、標準語との対比において価値あるものとして認識されている側面を指摘したものと言える。

SNS においても、たとえば、LINE スタンプ<sup>1</sup>には、各地の方言が使われたものが多数あり、自身の使用方言のスタンプに加えて、他地域の方言も気軽に使用することが可能である。LINE スタンプはテキストを打つ手間をかけることなく、やり取りの中に何らかの効果を生み出すことをねらった方言使用と言えるだろう。

日常会話において、同じ方言話者同士、あるいは、気の置けない者同士で

---

<sup>1</sup> イラストだけのものやイラストに文字が付されたものなどを LINE のメッセージとして送信することができる。



あればその場では方言が無意識に使われる可能性が高い。これは、話し言葉であることも大きい。他方、SNS は、文体は話し言葉に近いが書き言葉である。したがって、SNS で方言を選択する、あるいは、選択しない行為には、話し言葉とは違った意識が働いていると考えられる。

本稿は、SNS（おもに LINE チャット、Instagram）において、方言の使用を意識的に行うことがあるか、また、反対に、方言を意識的に使わないことがあるか、それはどのような場面か、また、その理由は何かについて、大学生を対象とした調査について考察する。

## 2. 調査概要

調査対象者、調査方法、設問内容は次の通りである。

- ・調査対象者：武庫川女子大学（兵庫県西宮市）の在學生1年生～4年生で、「SNS から日本語を見る」<sup>2</sup>2020年度の前期受講者102人。有効回答数99。対象者の母方言は、関西方言88人、関西方言以外11人。
- ・調査方法：グーグルフォームに設問を投稿し、受講者が回答を入力する。
- ・設問内容：次のA・Bについて自由記述とし、収集したデータから情報を抽出した。

A：SNS を利用する際に意識的に方言を「使う」ことがありますか。あるとすればどのような状況ですか。その相手や理由なども入力してください。

B：SNS を利用する際に意識的に方言を「使わない」ことがありますか。あるとすればどのような状況ですか。その相手や理由なども入力してください。

当該大学の在學生は関西地方出身が比較的多いため、調査対象者の母方言

---

<sup>2</sup> 本学の共通教育科目。2020年度前期は Google Meet による遠隔授業で行った。

も関西方言が多くなっている。調査にはグーグルフォームを利用した。当該授業がオンライン形式で行われており、対面での質問紙による調査は不可能であったためである。また、回答は選択式ではなく自由記述とした。選択肢を設けた上で回答を得ると、集計などでは手間が少なくて済む。しかし、反面、特に「状況」「相手」「理由」については、調査者の想定した範囲内、つまり、選択肢の中での回答しか基本的には得られないことになる。それを避けて、より具体的で率直な回答を収集するために自由記述とした。

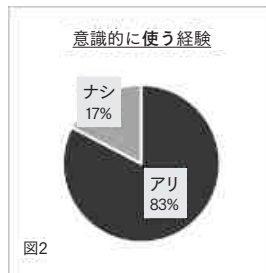
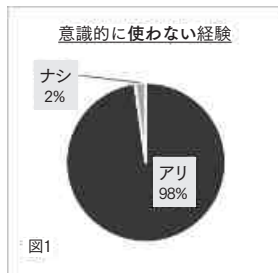
### 3. 調査結果と考察

#### 3.1 方言の意識的な使用の有無と相手

まず、「意識的に方言を使ったことがあるか、ないか」の結果を示す（図1、図2）。

SNS の利用時に「意識的に方言を使わない経験がある」のは98%とほぼ全員で、「意識的に方言を使う経験がある」のは約8割である。方言の代わりに選択される形式は、「標準語」がもっとも多く63人/99人（63.6%）であった。そのほか、自身の方言（生育地方言）を使わない代わりとして、「関西方言」を使うといった回答もある。これは、大学入学後、周囲に関西方言を使う人が多いため、自身の方言を使わず、周囲に合わせることを選択していると考えられる。

方言は、近い間柄のコミュニティで、無意識のうちにごく自然に使われる日常の言葉である。そうした性格から、目上の人に対してやフォーマルな場面などには控えるのがよいとされている。SNS の使用においても、目上



の人とのやり取りは当然ある。大学生では、先生やクラブの先輩とのやり取りが想定され、そのような場で方言を「意識的に使わない」回答が多いことは当然の結果と言える。

方言は、日常、無意識に使われ、あえて、使おうとして使うものではない。したがって、「意識的に使う」回答はそれほど多くないと予想される。しかし、「意識的に使う経験アリ」は8割を超えている。では、「意識的に方言を使う」とはどういうことだろうか。

以下、「相手」「場面」「理由」と関連付けながら、方言の意識的な使用と不使用について考える。

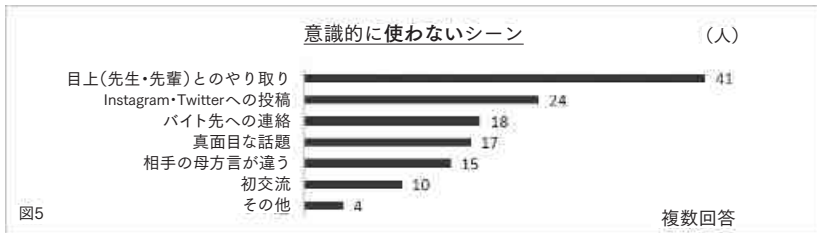
まずは、「相手」である。「意識的に使わない」回答（図3）では、「目上である先生や先輩」、「アルバイト先」など、改まった言葉遣いが必要とされる相手に対するものが多い。これらは、先に述べたように、フォーマルな場面では使用を控えた方がよいという、方言の一般的な使用に沿ったものである。Instagram や Twitter など「不特定多数」に公開している SNS では居住地や出身地の情報を隠す意図もありそうだ。

一方、「意識的に使う」相手は、「友達・家族」がほとんどである（図4）。親しい間柄の相手に対して意識的に方言を使っている。こちらの Instagram や Twitter への投稿は、友人、知人だけに公開している場合が想定される。



『令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』によれば、LINE の利用率は10代：93.7%、20代：97.7%であり、大学生にとっての SNS 利用は、きわめて日常的な行動であると言える。相手が親しい間柄ともなれば、SNS であっても方言を使うのは「無意識」に行われるのが自然だ。それなのに、半数以上が方言を「意識的」に使うと答えていることは興味深い。これについて、さらに「場面」「理由」の結果を示しながら考えたい。

### 3.2 方言の意識的な使用の有無とシーン



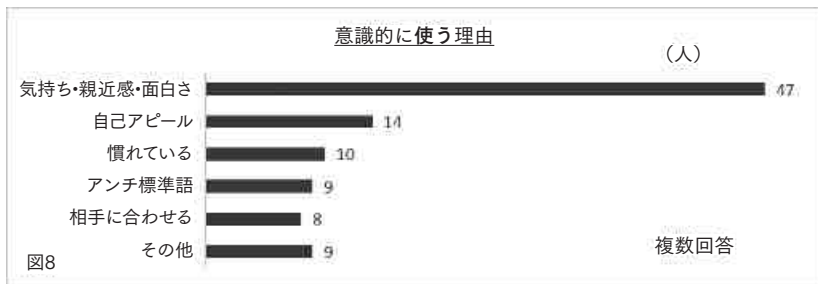
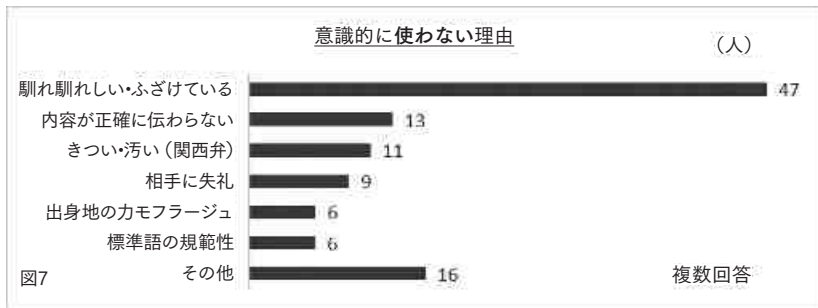
「場面」(図5、図6では「シーン」として表示) で多かったものを見ると、「使わない」場合(図5)は、「目上とのやり取り」「Instagram や Twitter への投稿」「バイト先への連絡」「真面目な話題」など、改まったシーンである。これらはすでに述べたように、方言のごく自然な使い方である。

他方、「使う」場合は、「友達・家族とのLINE」が最多である(図6)。先に見た「相手」(図4)とも重複するが、遠慮の少ない場面でのやり取りということになる。身近な相手に対しては、無意識でも方言を使うだろうが、

そのような場面で意識的な使用が確認される。これは、3位以下「感情伝達」「ふざける時」「ボケ・ツッコミ」などとの関連が強いと思われる。用件などの事実を伝えるためではなく、感情として「自分の気持ち」を表現し伝えるために方言を使用しているというものである。ここからは、標準語ベースの言葉では、通りいっぺんの気持ちしか表せないが、相手が親しい場合、方言らしい方言を意識的に使うことによって、気持ちが十分に伝わると考えていることがうかがえる。

また、「ボケ、ツッコミ」「温かさ・やわらかさを演出」というのも、伝える内容に情緒的な要素を加えるものと言えよう。これらのシーンでの使用は、方言が表現、伝達に特別な効果を発揮することを理解した上での意識的な行為と考えることができる。たとえば、関西方言の「なんでやねん」はツッコミの定番とされるが、タイミングが合っこそ、その効果は発揮される。タイミングよく行うためには、そこに、そこに「意識的」な操作を加える必要がある。

### 3.3 方言を意識的に使う理由・使わない理由



最後に、理由について確認する。「使わない」理由(図7)の最多である「馴れ馴れしい・ふざけているように思われる」と、「使う」理由の最多である「気持ちが伝わる・親近感を表すため・面白さを表現するため」は、表裏一体のものである。「親近感を出す」ことが、「馴れ馴れしさ」の表れであったり、不真面目な態度と受け取られたりしかねない、そのために使用を控えるといった意識がうかがえる。

また、文字による「情報の伝達」という面から考えると、方言を使用することによって誤解が生じたり内容が不正確に伝わったりするなど、方言がマイナスに作用することを回避したい意識もみえる。方言が「内容の正確さ」になじみにくい表れだと言える。さらに、「相手に失礼」といった回答なども含めると、やはり、規範意識とかかわるものが多い。これらは、シリアスな場面での方言使用を想定したものだ。そういった場では方言を使わない方がよいと考える学生の多さによるものだろう。

一方、意識的に「使う」理由(図8)の中で、特に関西方言の特徴だと言えそうなのは、「面白さ」「自己アピール」「アンチ標準語」である。この結果は、回答者の9割近くが関西方言話者であることによる。一般に、関西方言は他の地域方言に比べて『強い』と言われる。それは他者からの評価であると同時に、関西方言話者自身が関西方言に抱いているイメージでもある。あえて関西方言を使うことで、何らかの良い反応が得られる可能性を知っているのだ。それゆえ、関西方言が「自己アピール」の手段ともなり得るだろう。

また、「アンチ標準語」については、特に関西方言話者は、標準語を使った際に「他人行儀で冷たい感じがする」、「使うと気持ち悪い」と言われた経験を持つ者が少なくないことと関係する。標準語を使いたくないという意識が、関西方言を使う理由となり得るのである。また、「気持ちが伝わる」「面白さを表現するため」といった理由からは、方言が感情伝達に効果的であるとの認識を示している。

#### 4. まとめ

以上、大学生の SNS 上での言語行動について、方言の使用・不使用を考察した。ここで中心としたのは、意識的に使用するか、意識的に使用しないかといった使い分けが、どのような相手・場面でなされ、その理由はなぜかということである。意識的に使わない場合、その代わりに標準語の形式や敬語の使用となるが、反対に、意識的に使う場面では、なぜ使うのか、その理由に関西方言らしさがうかがえる結果となった。

大学生にとって、方言は、感情や気分を相手に直感的に伝えるときに役立つもので、ここぞというときに、相手に共感を呼び起こせるアイテムであろう。それゆえ、親しい相手に、想いを込めた内容を強く伝えたいとき、論理を超えて感覚的に説得したいときに、意識して方言を利用するのである。SNS では、その方言の強みを認識し、効力を信じているために、より意識的な使用が多くなっていると思われる。

方言イコール地域の特徴的な形態の語句という認識は、SNS が形式的には書き言葉であることとも関係する。書き言葉では、アクセントやイントネーションの表示は難しい。その点、方言らしい方言、つまり、特徴的な語句は示しやすい。そういったことも、意識的に方言を使う際のポイントとなると思われる。どのような方言を意識的に使うのかについては、日常会話と SNS とでは異なる可能性もあるだろう。これについては、今後、機会を改めて調査を行いたいと考える。

#### 付記

調査にあたっては、武庫川女子大学の共通教育科目「SNS から日本語を見る」の受講者に協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

#### 参考文献・参考サイト

小林隆 (2004) 「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』第 7 巻 第 1 号 pp.105-107. 社会言語科学会

総務省情報通信政策研究所 (2021) 「令和 2 年度情報通信メディアの利用時

間と情報行動に関する調査報告書」[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000765258.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf) 2022年3月28日ダウンロード

田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代ーニセ関西弁から龍馬語までー』  
岩波書店





# イギリス新教育運動初期における「自然学習」の勃興

—社会改革と用語選択に着目して—

山崎 洋子

## はじめに

19世紀末から1930年代にかけて、イギリスでは、注入主義・暗記中心主義の学校教育を旧教育とネーミングし、それを批判する形で新教育を求めた教育改革が生起した。新教育の思想は、自由、個性、活動、体験などの言葉に教育的意味を付与し、それらを称揚する形をとった。この歴史事象は新教育運動と言われるが、新教育運動が生起し展開された背景には、大学拡張運動、女性参政権運動、アーツ・アンド・クラフツ運動、セツルメント運動、田園都市運動など、様々な社会運動があり、新教育を求めた教師たちは、当然のことながらその影響下にあった。彼らの多くは自らがパイオニアであるとか、新教育運動家であるといった自覚を持っていたわけではなかったが、学校教育の枠内で教育実践の改革に果敢に取り組んだ。この嚆矢として挙げることができる事例には、サンプティングという田舎の学校の校長を務めたフィンレイ＝ジョンソン (Harriet Finlay-Johnson, 1871-1956) の教育実践がある<sup>1</sup>。彼女が考案した方法は、劇化学習法 (Dramatic Method in Teaching) とネーミングされ、勅任視学官、エドモンド・ホームズ (E. G. Holmes, 1850-1936) らの高い評価を受け、やがて1910年代から1920年代の学校教育に大きな影響を与えた<sup>2</sup>。

実は、フィンレイ＝ジョンソンが用いた方法のなかで最も重視されたのが

---

<sup>1</sup> 拙稿「言語教育と学校劇— *The Dramatic Method of Teaching* を訪ねて—」武庫川女子大学『言語文化研究所年報』(第30号, 2019, pp. 61-90.) 参照。

<sup>2</sup> ホームズ及びジョンソンの著作の邦訳版の情報については、拙著『イギリス新教育運動の生起と展開—教師の自律性と専門職化の歴史』(2022, 知泉書館, p. 15) を参照。

自然学習 (Nature Study, Nature studies, 自然科とも訳されてきた) という教科であった。彼女は、「自然学習はすべての教科の基礎になった」<sup>3</sup>と述べ、①観察する、②観察した事実を話す、③それを文学に関連づけて話す、④その根拠・理由を議論し、植物の美を想像する、というステップを踏んだ自然学習が言葉の習得に良い結果をもたらしたとして、その具体について詳細に説明している<sup>4</sup>。それゆえ、自然学習は、新教育運動において重要な学習であったことが確認できる。もちろん、歴史的に遡るならば、スコットランドのニューラナークの工場に性格形成学院 (The Institution for the Formation of Character, 1816) を付設し運営した社会主義者のオウエン (Robert Owen, 1771-1858)、オウエンの思想に傾倒し幼児教育運動を牽引したウィルダスピン (S. Wilderspin, 1791-1866)<sup>5</sup>、『トレーニング・システム』(1836) を著わしたストウ (D. Stow, 1793-1864) からも、教師が子どもたちに木や山の植物、草花、気候などに興味を向けるように指導することをロマン的で自然主義的な観点から重視していた。それゆえ、彼らの教育思想を自然学習の源流の一部と捉えることはできる。しかしながら、彼らの思想が19世紀末の自然学習の勃興に直接的な影響を与えた、と解釈するにはやはり無理がある。読み書き計算に偏重した「出来高払い制 (Payment by Results)」(1862-1895) の雰囲気が残る学校教育のなかで、自然学習が重要な位置を占めたのはいつ頃のことなのか、また、自然学習とはどのような起源を有し、そこにはどのような社会的背景があったのか、読み書き計算の習得が最も重要視された状況下で、新教育運動に関与した教師たちは、いかなる思想に後押しされて自然学習に取り組んだのか、といった問いが湧いてくる。ところが、環境教育が重視されているにもかかわらず、その源流に位置づく自然学習に関する先

<sup>3</sup> Harrier Finlay-Johnson, *The Dramatic Method of Teaching*, James Nisbet & Co., Limited, 1911, p. 4.

<sup>4</sup> Harriet Finlay-Johnson, *ibid.*, 1912 (ed.), pp. 8-9. (霜田静志訳『劇化せる各科教授』日本教育学会, 1923, p. 6.)

<sup>5</sup> ウィルダスピンの幼児学校は歴史遺産として残され、学校博物館となっている。次のウェブサイトを参照。http://www.wilderspainschool.org.uk/history-of-wilderspainschool/, accessed 13thApr. 2021

行研究は、今のところ数点あるのみである<sup>6</sup>。

そこで、本稿では、新教育運動と自然学習の関係そのものにアプローチするのではなく、自然学習の潮流を解明するためのいわば予備的考察として、住宅改良運動や自然保護運動に取り組んだオクタヴィア・ヒル (Octavia Hill, 1838-1912) と、地理学者、生物学者、社会学者、都市計画家として自然学習を推奨したパトリック・ゲデス (Patrick Geddes, 1854-1932) の活動に着目し、彼らの運動・活動のなかで、どのような言葉やキャッチフレーズが選択され、社会改革運動としての力を発揮したのか、自然学習を強力に推進したゲデスがどのような見解を開陳したのか、といったことを明らかにし、このことを通して自然学習の勃興背景とその成立過程を明らかにする。

## 2. オクタヴィア・ヒルの社会改革運動ーオープン・スペース/コモン/ナショナル・トラストー

オクタヴィア・ヒルは、周知のようにナショナル・トラストの創設者の一人として知られた女性であり、人生を社会改革に捧げた人物である。ここで、まず、彼女の人生を概観しておきたい。1838年、ケンブリッジシャーのウィズビーチで誕生したオクタヴィアは<sup>7</sup>、まさに、産業革命の負の遺産が社会の隅々に現れ始めた時期の社会的影響を受けた。父は元銀行家でトウモロコシ商人であったが、スコットランドのオウエンの思想に傾倒し、また、母は当時のイギリスの教育界で受容されていたスイスのペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746 - 1827) の教育理論・実践に傾倒していた、極め

---

<sup>6</sup> 先行研究には次のものがある。E. W. Jenkins (1981), 'Science, Sentimentalism or Social Control? The Nature Study Movement in England and Wales, 1899-1914', *History of Education*, Routledge, 10:1, 33-43; E. W. Jenkins and B.J. Swinnerton (1996), 'The School Nature Study Union 1903-94', *History of Education*, Routledge, 25: 2, 181-198. 安藤聡彦 (1991) 「イギリス環境教育論の原型：パトリック・ゲデス再考」一橋論叢, 105(2): 156-175; 安藤聡彦 (1999) 「一九〇二年夏、リージェンツ・パーク」一橋論叢, 121(2): 221-238.

<sup>7</sup> E・モバリー・ベル著、平弘明／松本茂訳『英国住宅物語ーナショナルトラストの創始者オクタヴィア・ヒル伝』(日本経済評論社, 2001)収録の「オクタヴィア・ヒル関連図」(pp. 376-380)参照。

て進歩的な両親であった。1840年、父親の破産により、ロンドン北部のエッピング、ハムステッド、また地方都市のグロスター、リーズといったところに移り住む。いずれの土地も環境破壊には至っていない自然豊かな土地であり、とりわけエッピングやハムステッドは後に自然保護に向けた運動が成功した場所であった。1843年には、幸運にも、母方の祖父の財的援助を受け、北ロンドンのフィンチリーに移り成長する。彼女が20歳を過ぎた頃は、ダーウィンの『種の起源 (On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life)』を出版した時期であり、自然選択や人種の保存 (preservation) というテーマを俎上に載せた研究はイギリス全土を震撼させるほどの影響力を持った。社会問題に敏感になり始めた20歳代が自然観の転換期であったことは、特筆に値する。なぜなら、ダーウィンの知見は、神の創造物としての自然というものは人知によって保護せねばならない対象である、との見解が人々に受容される土台を形成することに寄与したからである。ちなみに、後に取り上げるトマス・ハクスリーはダーウィンの理論の最大の擁護者であったことも興味深い。ただ、他方で、社会に目を転じると、労働者問題は減じるどころか、増大する一方であった。そこで、自由主義者らは、労働者の健康維持のためのプレイグラウンドの確保を重視し、1859年4月には、レクリエーション用地法 (Recreation Grounds Act)<sup>8</sup>を成立させたのであった。

1860年代、20歳代半ばになった彼女は貧困層の人々の劣悪な住環境に益々心を痛める。この心性と問題意識が彼女のその後の行動の根底に絶えず横たわっているが、最初の行動のきっかけは、1864年にかのラスキン (John Ruskin, 1819-1900) が父の遺産で家屋3戸を購入し、その家主をヒルに依頼したことに始まった。これを手始めに、翌1865年、彼女は、貧しい人々の生活や健康を確保するために、オープン・スペース (open space) という

---

<sup>8</sup> グレアム・マーフィ著、四元忠博訳『ナショナル・トラストの誕生』緑風出版、1992, p. 24. また、<https://www.legislation.gov.uk/ukpga/Vict/22/27/contents/enacted> (accessed 30 Nov. 2021) も参照。

言葉を冠したキャンペーンを展開する。オープン・スペースという極めてシンプルな名詞を冠したことによって、この言葉と意味内容は人々の記憶に残ることになる。ちなみに、日本で用いられるオープン・スペースという言葉は、公園や墓地など、都市計画上の公共の空を表すが<sup>9</sup>、イギリスでは公共のスペースだけでなく、民有地であっても、一般の人々や公衆に開放している庭園・公園・広場・コモン・遊歩道・池・林など、共用の空地・空間を指す。それゆえ、オープン・スペースとは、人々のために開放している、個人所有の土地（民有地）をも含む「すべての共有の空間」を指し、そこはだれもが使用することができるスペースなのである。

さらにヒルは、1865年に、功利主義の哲学者のミル（John Stuart Mill, 1806-1873）、自由党の国会議員のエバーズリー（Lord Eversley, as George Lefevre, 1831-1928）、弁護士ハンター（Sir Robert Hunter, 1844-1913）らと協力し、コモン保存協会（Commons Preservation Society）設立のために尽力する<sup>10</sup>。周知のように、ミルは『自由論（*On Liberty*）』（1859）を刊行したりベラリストであり、当時、無所属の下院議員を務めていた。また、エバーズリーは、グラッドストーン内閣において貿易省副大臣を務めた人物であるが、彼は、ハンプトン・コート・パーク（Hampton Court Park）、キュー・ガーデン（Kew Gardens）、そして後述するリージェント・パーク（Regent's Park）を一般の人々に開放することにも尽力した自然主義者であった。

ところでコモン（commons）とはどのようなところを指すのであろうか。

---

<sup>9</sup> 中島直子「オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動の発展への貢献」『地理学評論』76(14), 2003, p. 1001.

<sup>10</sup> 保存という言葉にかかわって、アメリカでは、二つの立場、すなわち保存派（Preservationists）と保全派（Conservationists）のバトルが起こるが、イングランドでは保全派や保全（conservation）という言葉が使われることはなかった。See Marybeth Carlson, Master Thesis, Nature Preservation and the Back-to-the-Land movement in Great Britain and the United States 1865-1895, Madison, Wisconsin University, 1986, p. 5. なお、本論文は、2020年4月、同校のリース氏（Prof. William J. Reese）のサポートを得て入手したものである。氏はアメリカ教育史学会の会長を務めた新教育運動研究の第一人者であり、現在、日本の教育史学会の海外特別会員である。

日本語では、コモンは入会地あるいは共有地と訳されるが<sup>11</sup>、コモンは集落地と農耕地の周囲に広がっている野原や森林地などを指し、そこでは、所有者ではない農民たちが家畜を放牧し、果実を摘み、薪、わらび、泥炭などを持ち帰ることができる権利（入会権）が認められた。それゆえ、コモンを保存するという行為は、自然豊かな恵みを与える土地を共有財産とみなす意識の保持を意味する。また、コモンの外側には、家畜の近寄れない広大な土地や山岳地などが広がっており、そこも囲い込まれていないためオープン・スペースと呼ばれた<sup>12</sup>。したがって、ラスキンやモリス（William Morris, 1834-1896）らの思想が自然賛美のロマン主義と社会思想あるいは社会改革思想を包含していたのと同様に、オープン・スペースやコモンの保存運動も、社会思想の側面を色濃く有していたのである。

ただし、任意団体であったコモン保存協会は、土地を有することができる法人格を持っておらず、地主の囲い込みや売買を明確に止めることはできなかった。そんななか、翌年の1866年には、都心から15マイル圏内の土地の囲い込みを禁止するロンドン・コモン法の制定が実現する。彼らはロンドン・コモン法を楯にオープン・スペースを守るキャンペーンに力を注いだ。そして、その成果が現れ、人々が自由に使えるコモンの確保が前進する<sup>13</sup>。さらに、コモン保存協会は、コモンの保存のために、村の人々がレクリエーション用に共同して使う芝生地などに、公共的性格を付与する訴訟を地主や鉄道会社を相手に行い続けた。その結果、協会はロンドン近辺のコモンすべてに公共的性格を付与することに成功し、またその重要性を国民に知らしめる役割を果たしたのである<sup>14</sup>。今日、ロンドン市内の各地でコモンの名称が付された緑地や公園があるのは、その成果の表れである。翌年には、園芸誌『ガー

---

<sup>11</sup> コモンズという言葉は、近年の日本の大学の学生用フリー・スペースを指して用いられることがあるため、その意味するところを想像することはできる。しかし、規模の点でいうと、雲泥の差である。

<sup>12</sup> 四元忠博『ナショナル・トラストの軌跡』緑風出版，2003，pp. 21-22.

<sup>13</sup> 同書，p. 23.

<sup>14</sup> 同書，p. 25.

ドナー (*The Gardner*)』も創刊され、政府による労働者階級へのある種の政策意図も加わり、少しゆとりのある労働者階級の人々の園芸熱も高まった。礼拝を終えた日曜日の午後には飲酒で時間を過ごすのではなく、子どもたちとガーデニングをする親子の生活スタイルも称揚された。一方、教育面では、1870年にイギリス最初の国民教育制度である基礎教育法 (*Elementary Education Act 1870*) が制定され、イングランドとウェールズの5歳から12歳までの子どもたちに対する国民教育の枠組みが定められた<sup>15</sup>。

1875年、ヒルはコモン保存協会の役員に就任する。その時期の論稿「人々のスペース (*Space for the people*)」は、労働者が休憩できる野外の空間、その子どもたちが安心して遊べる場所、散歩できる場所、レクリエーション空間という4種のスペースの必要性の提言であった<sup>16</sup>。労働者の休息場所、子どもの遊び場、散策歩道、レクリエーション地の4つのスペースの確保は、まさに人間にとっての権利として認められねばならないとヒルは主張したのである。1876年8月には、2014年4月まで改訂を続けながら使用されたコモン法 (*Commons Act 1876*) が成立する<sup>17</sup>。ヒルらの運動は、コモン法に結実した。その後の彼女の活動は1884年にはイギリス議会での陳情活動に及び、その活動も1886年に実を結ぶ。たとえば、郊外の森林地帯開発に反対するキャンペーンでは、ウィンブルドン・コモン (460ヘクタール)<sup>18</sup>、エッピング・フォレスト (2,400ヘクタール)、ハムステッド・ヒース (320ヘクタール) などの巨大な緑地を「グリーン・ベルト (*Green Belt*)」と称した彼女

---

<sup>15</sup> <http://www.educationengland.org.uk/documents/acts/1870-elementary-education-act.html>, accessed 30 Nov. 2021.

<sup>16</sup> 中島, 2003, pp. 1005-1008.

<sup>17</sup> Commons Act 1876, <https://www.legislation.gov.uk/ukpga/Vict/39-40/56#:~:text=Commons%20Act%201876%201876%20CHAPTER%2056%2039%20and,the%20Acts%20relating%20to%20the%20Inclosure%20of%20Commons>, accessed 30th Nov. 2021. この法律は強制力を有しなかった。

<sup>18</sup> ウィンブルドン・コモンはパットニー・ヒース (*Putney Heath*) 及びパットニー・ローワー・コモン (*Putney Lower Common*) を含む。これらは1871年のウィンブルドン・アンド・パットニー・コモン法により、エンクロージャーされないように、また何らかの建物が建築されないように保護された。



の類い希な発想によって、ロンドンの周辺のオープン・スペースの確保に成功するという結果を得たのである。

その後、ヒルは姉のミランダが公共空間や労働者の家庭に美を普及することを目的とした慈善団体、カール協会 (Kyrle Society) を自宅に設立すると、1879年には、カール協会にオープン・スペース部会を設置し<sup>19</sup>、活動拠点を確保する。この活動は1890年頃になるとロンドン以外の複数の都市にも広がっていく。ロンドン・カール協会には、装飾、音楽、図書、オープン・スペースの4つの部会が作られ<sup>20</sup>、労働者とその家族に健康な生活を提供するためのキャンペーンが活発に展開されたのである。

1895年、ヒルの活動は、ついに自然保護を掲げたナショナル・トラスト (The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty) という今日に続く組織の設立へと舵を切る。それは、ヒルとハンター、ローンズリー (Hardwicke Drummond Rawnsley, 1851-1920) の三者を創設者とし、環境保存のための国民的運動を担う組織となった。ナショナル・トラストの創設は、オープン・スペースという地域の空間の確保という意味を超えて、イギリス全土の美しい自然環境の保護と信託という考え方にまで進展したのである。コモン保存協会は、1899年にナショナル・フートパス協会 (National Footpaths Society) を併合してコモン・フートパス保存協会となり、コモンだけでなくコモンのなかを走るフートパスの保護も対象とした。

このようにヒルのオープン・スペース運動は、緑地、森、フートパスといった自然環境を適切に使用しつつ、それを保護し保存するという思考や態度を確実なものにしていった。そして、自然保護運動の参画者や賛同者は、オープン・スペースという極めて直裁的な言葉を通じて、自然を保存する知恵と習慣を、いわば人間としてのセンスとして磨いていった。それゆえ、ヒルの社会改革思想は、人々の価値観や人々の生活のあり方の再考を促し、地球を守るという思考様式をイギリスの人々に根付かせることに寄与したのである。

---

<sup>19</sup> 中島, 2003, p. 1002.

<sup>20</sup> 同書, p. 1014.

### 3. パトリック・ゲディスの社会改革思想—都市学／地域調査／進化—

自然志向の態度様式はイギリス全土に広がり、ヒルよりも15歳ほど若い、スコットランドのパトリック・ゲディスの活動につながっていく。では、ゲディスとはどのような人物であり、彼の活動はどのようなものであったのであろうか。本節では、ゲディスの初期の活動を概観し、彼がエジンバラの展望塔(Outlook Tower)を使って活動するなかで得た思考を概括する。

ゲディスは、1854年、スコットランド、西アバディーンシャー、バラター(Ballater)で長老教会派(The Presbyterian Church)<sup>21</sup>に属する両親のもとに誕生した。1857年にはスコットランドのパーズ(Perth)に引越し、初等教育を終えた15歳の時に父とクライド渓谷の自然のなかを200マイルも歩きまわるといふ経験をしている。クライド渓谷地域は、イギリスが「世界の工場」と讃えられたヴィクトリア盛期、ロンドンに次ぐ「第二の都市」として栄えたグラスゴーや、オウエンの工場と性格形成学院があったニューラナーク地域を含んでおり、「大英帝国の工場」と呼ばれていた。紡績工場に必須の潤沢な澄んだ水を供給するクライド渓谷は自然の豊かさと美しさ、さらに厳しさを併せ持っていた。そのことを体験した彼は、田園都市運動が取り組んだように新たに都市を作っていくのではなく、すでに存在する都市に自然を導入し、またすでに存在する自然を慈しみ、育てていくという意味での「自然への愛情」を育むことの重要性に気づいたのである。

自然の重要性を自覚した彼は、1874年、エジンバラ大学に入学し、生物学を学び始める。しかし、それは1週間のみであった。というのも、ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-1895)の著作、『地形の調整(Lay Sermons, Addresses and Reviews)』(1870)を読み、余りにも強く感銘を受けたからである。そして、ハクスリーが教授をしていたロンドンのロイヤル・スクール・

---

<sup>21</sup> 長老教会派とは、監督制度を廃し、教職と長老職の同権を唱え、長老は神の言の宣布者であるとするキリスト教プロテスタント教会の一派である。カルヴァンなどのスイス宗教改革の流れを汲むものの総称であるが、スコットランド起源の改革派教会は長老教会と称す。

オブ・マイنز (Royal School of Mines in London)<sup>22</sup>で、彼から生物学を学び始め、1874年から78年までの長い期間を生物学の研究に費やした。ハクスリーは、先述したように、徹頭徹尾、ダーウィンの『種の起源』の論じた進化論の擁護者であった。また、ハクスリーは、1871年から75年までの間に取り組み始めたデボンシャー委員会 (Devonshire Royal Commission on Scientific Instruction and the Advancement of Science) の委員も務め、科学教育の重要性を強調する立場をとっていた。ちなみに、デボンシャー委員会は、第7代デボンシャー公爵 (7<sup>th</sup> Duke of Devonshire) のウィリアム・キャヴェンディッシュ (William Cavendish, 1808-1891) を委員長とし、1839年から1849年までの期間に枢密院教育委員会 (The Committee of the Privy Council on Education) の初代事務局長を務めたケイ＝シャトルワース (F. Kay-Shuttleworth, 1804-1877) にもメンバーとして活躍した重要な委員会であった。デボンシャー委員会は8つの報告書を刊行するが、そのなかで、学校、カレッジ、大学といった教育機関でより良い理科 (科学, science) 教育が必要であることや、科学省あるいは科学教育省を設置することを提言した<sup>23</sup>。したがって、1870年代半ばというのは、自然環境に対する研究や教育の重要性が指摘され始めた時期、と捉えることができる。

こうした動きのなかで、ゲディスは「都市への2つの接近法」、すなわち、事実を詳しく観察し、それらの事実のなかからのみ結論を導き出すという観点と、都市も生物と同じように「進化」するという観点を獲得した<sup>24</sup>。さらに、彼は1879年のメキシコへの調査旅行中の3ヶ月間に視覚障害を被ったことによって、図らずも、自然に関する思索を深め、自然についての抽象的で図

---

<sup>22</sup> 1851年に設立された王立鉱山学校である。これは1907年にインペリアル・カレッジ・オブ・サイエンス・アンド・テクノロジーに組み込まれ、2005年よりインペリアルカレッジ工学部となっている。

<sup>23</sup> 次に示すデジタル版でデボンシャー報告書を入手することができる。2021.<http://www.educationengland.org.uk/documents/devonshire/index.html>, accessed 30 Nov.

<sup>24</sup> バトリック・ゲデス 著、西村一朗訳『進化する都市：都市計画運動と市政学への入門』鹿島出版会、2015、p. 355.

式的な思考を繰り返して創出する機会を得る。それは、都市を文明史的に捉えることの重要性への気づきであると同時に、都市を図式的に捉える視点の重要性への気づきであった。なぜなら、これらの視点は国民国家の成立によってもたらされた領土や国境という思考法から人々を解放するグローバルな視点であるからであり、都市を文明史的・図式的に捉え、自然と人工物である都市を地球規模で保存する思考枠組みを創出する視点であるからである。

その後の1880年から88年までの期間、彼は、エジンバラ大学において植物学の実験者 (Botany demonstrator) となって働く。そして、その間の1883年には、エジンバラ王立植物学協会への報告書の執筆を主導し、自然保護に関する専門家としての地位を確かなものにし、自然保護論者 (conservationist) としての名を馳せるようになった。他方、私生活では、1886年、リバプールの裕福な商人の娘で、オクタヴィア・ヒルとともにロンドンのスラム街で活動していた32歳の活動家、アンナ・モートン (Anna Morton, 1857-1917) と結婚する。この結婚生活で、彼は、都市における女性の役割についての彼の認識を形成していく。そして、都市づくりにおいて女性が決定的な影響を持っているということを至る所で強調するようになるのである<sup>25</sup>。他方、アメリカでは、この頃に自然学習運動 (Nature Study movement) と称された教育改革運動が起こった。もちろんこの背景には、イギリスのラスキンらによるアーツ・アンド・クラフツ運動のアメリカへの影響もあると推察されるが、アメリカでは、自然学習 (Nature study) という言葉は、スイスの教育家・ペスタロッチが考案しアメリカに伝播された実物教授 (object lesson) や、当時、採用されていた育苗学習 (plant work)、基礎学校理科 (elementary science) に代替する言葉として使用されていた<sup>26</sup>。この状況は、後述するように、イギリスの自然学習運動との違いである。

---

<sup>25</sup> See Walter Stephen (ed.) *Learning from the Lasses: Women of the Patrick Geddes Circle*, Luath Press Limited, 2014.

<sup>26</sup> L. H. Bailey, *The nature-study idea: being an interpretation of the new school-movement to put the child in sympathy with nature*, Doubleday, Page & Company, 1905 (初版1903), p. 7.

その後、ゲディスはダンディー (Dundee) のユニバーシティ・カレッジ<sup>27</sup>の植物学教授に就任し、1888年から1919年まで、夏学期限定の植物学教授として教育研究活動に従事する。その間の1892年、ゲディスは、エジンバラの旧市街のエジンバラ城の近くにあった塔を購入するという行動をとった<sup>28</sup>。展望塔の最上階は、地域全体のパノラマのような眺めを得ることができる魅力的な場所であった。彼はその建物に居住可能な装置をそなえ、そこで視覚能力と個人と外的現実との関係についての考えを20年以上にわたって説明し続けるのである。彼の言う視覚能力とは観察力を意味するが、個人の行動の積み重ねがいかなる現実問題を引き起こすかを鋭く観察することを意味する。展望塔はイギリスでの彼のすべての活動の拠点となり、エジンバラの旧市街を彼が再生するための原動力になった。この展望塔で発展させた見解が彼の思想の基礎というべき「都市学と地域調査 (Civics and Regional Surveying)」である。都市を文明的に捉え、地域を調査するという方法はここでの活動を確実に実り多いものにし、革新的なアイデアをもった都市学の構想を生んだ。都市学は、市民 (citizen) の住む都市に関する新規の学問領域の創出につながり、やがて彼の活動実績とその評判は、当然のことながら学校教育に影響を与えるのである。

#### 4. 新学校及び国民教育における自然学習の導入—ガーデニング/実物教授—

ところで、イギリスの学校では自然保存や自然保護に関連する授業は、いつごろ導入され、それはどのような背景を有していたのであろうか。ここで学校教育において自然学習に類する学習がどのように取り扱われていたか、ということに少し立ち入っておきたい。その際に留意しておきたいのは、ゲディスがダンディーやエジンバラで活動していた時期は、イギリス新教育運動の嚆矢となった新学校 (New Schools)<sup>29</sup>が創設された時期に相当するという点

<sup>27</sup> 1881年に設立された現在のダンディー大学である。

<sup>28</sup> 展望塔については、次のリンクを参照。https://socks-studio.com/2020/12/27/from-vision-to-knowledge-patrick-geddes-outlook-tower-1892/, accessed 30 Nov. 2021.

<sup>29</sup> これらの学校はパブリック・スクール改革を試みた学校であるが、後にビデールズ校とキング・アルフレッド校は、幼児教育やブレップ・スクールの部門をも展開する。ゲディスは、後述するように息子をキング・アルフレッド校に送っている。

である。新学校は新しい教授内容や教授方法を積極的に考案・創出する活動を主導した。とりわけ、新学校のなかでもパイオニア校と称されるアボッツホーム校 (Abbotsholme school, 1889-)、ビデールズ校 (Bedales School, 1893-)、キング・アルフレッド校 (King Alfred School, 1898-) は、人々の生活を念頭においた活動的な学習内容を積極的に開発し、教育界をリードした。たとえば、アボッツホーム校の創設者の一人、セシル・レディ (Cecil Reddie, 1858-1932) は、ゲディスや自然主義と社会主義の思想を展開していたカーペンター (E. Carpenter, 1844-1929)、社会批評家で芸術教育運動を主導した社会主義者のラスキンらの影響を受けた新教育運動家であった。それゆえ、社会運動と教育運動とは不可分な関係にある、あるいは混然一体となって展開されるべきだ、と彼らは捉えていたのである。アボッツホーム校には創設時より、ガーデニングも時間割のなかに設定され、徒歩か自転車による自然観察も時間割のなかに入っていた<sup>30</sup>。もちろん、他の新学校も同様のカリキュラムを実施していたことは重要な歴史的事実である。

しかしながら、公立公営学校はそのようなカリキュラムではなかった。「出来高払い制」が未だ席卷していた1893年新教育規程には、自然学習、自然観察、ガーデニングなどに関する記述は存在しない<sup>31</sup>。その状況が変わるのは、「出来高払い制」が廃止された1895年以降のことである。先行研究によれば、教育局 (Education Department) 公布の1895年教育規程 (Code of Regulations for Day Schools with Schedules and Appendices, 1895) では、自然学習が「学校園 (school garden)」<sup>32</sup>で適切になされている学校に対して助

---

<sup>30</sup> 拙著, 2022, p. 352.

<sup>31</sup> 同書, p. 194.

<sup>32</sup> See E. W. Jenkins, *Science, Sentimentalism or Social Control? The Nature Study Movement in England and Wales, 1899-1914*, *History of Education*, vol. 10, no. 1, 1981, p. 34. また、彼はこの典拠として Education Department, *Code of Regulations for Day Schools with Schedules and Appendices* (1895), pp. 23-24. を挙げている。なお、日本での学校園に関する文献としては、香月喜六著、岡村猪之助、針塚長太郎序『学校園設置法』(育成会, 1905)があり、本書には、欧米の学校園についての解説が随所にある。

成金が支給されるようになった。1895年教育規程については第一次史料の入手が不可能であるため確認することはできないが、その2年後の1897年教育規程には、学校園という用語は一語も存在しない。ただし、「コテージ・ガーデン」（男児）という言葉を用い、そこでの活動を、週あたり20時間以上、最小14人集団で実施すると助成金の対象になる、と規定している<sup>33</sup>。また、教育局は、視学官の報告と勧告を検討した上で、（1）基礎教育の諸科目における適切な指導、（2）事物と自然現象及び日常生活現象に関する簡単な授業、および（3）適切で多様な作業（occupations）を挙げ、これらに対しても助成金支給の対象になると規定した<sup>34</sup>。さらに、1896年8月31日以降、基礎学校のスタンダード（水準）<sup>35</sup> I、II、IIIにおいて、読み・書き・計算・裁縫（女子）、描画（男子）と並んで実物教授（低学年用）が義務化され、<sup>36</sup>「クラス教科（Class Subjects）」の一つとして実物教授が位置づけられた<sup>37</sup>。また、スタンダード I、II、IIIのすべての年間授業スケジュールにおいて、コースA「機器」、コースB「動物生態学」、コースC「植物学」または「園芸」、コースD「農業原理」、コースE「化学」、コースF「音・照明・熱」、コースG「磁気と電気」、コースH「実験的算数・物理・化学」を挙げ、スタンダード I、II、IIIのそれぞれのコースにおいて、30の実物教授（Thirty object lessons）をすることを示したのである<sup>38</sup>。

---

<sup>33</sup> Education Department, *Code of Regulations for Day Schools with Schedules and Appendices* (1897), p. 5, 26.

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 19.

<sup>35</sup> スタンダードの設定は、1862年改訂教育令において、6歳児から12歳児を対象にスタンダード I からVIまで定められた。10年後の1872年教育規程において、スタンダード I が廃止され、教育状況の査察は7歳児から始まり、スタンダード II からVIが、スタンダード I からVになり、新しいスタンダードVIが加えられた。（リチャード・オルドリッチ著、山崎洋子・木村裕三監訳『教育史に学ぶ—イギリス教育改革からの提言』2009年、知泉書館、pp. 251-252.）

<sup>36</sup> Education Department, *Code of Regulations for Day Schools with Schedules and Appendices* (1897), p. 4.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 22.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 46. なお、1897年教育規程では、スタンダードは I からVIIまで定められている。（*ibid.*, pp. 46-47.）

ここで用いられている実物教授は、もちろんスイスのペスタロッチの考案した教授法である。ペスタロッチの実物教授は、教師が観察と自然法則によって事物を教授することに特徴があり、子どもに実際に提示する実物を、質・部分・用途の3項目の下に分析し、それらを有機的に関連づける能力を教師に求めた。この方法は、1830年代にイギリスに導入されるが、スコットランドのニューラナークの工場にオウエンが付設した性格形成学院でも取り入れられていたため、一般に馴染みのある方法であった。とはいえ、「出来高払い制」の導入は、教師と生徒からこの方法を廃止せざるを得ない状況に陥らせた。しかし、「出来高払い制」の廃止によって、再び実物教授が重視され、その対象として自然界の事物が取り上げられるようになったのである。それゆえ、自然学習というフレーズが一般化される以前には、実物教授がその内容をカバーしていた、と捉えることができる。一方、スコットランドでは、自然学習の重要性が自覚され始め、1898年には自然学習が基礎学校に位置づけられた<sup>39</sup>。また、1899年10月には、政府に農業教育委員会 (Agricultural Education Committee) が組織され、委員会は子どもの環境を課業の基礎とし、彼らを生き物の世界と直接触れ合わせ、自然の単純な諸事実に親しませることによって、田舎の学校のカリキュラムと都市の学校のカリキュラムと異なったものにしていくことを目指したのである<sup>40</sup>。

20世紀に入ると、1893年の基礎教育法を改正すべく1900年基礎教育法 (Elementary Education Act, 1900) が公布された。教育経費及び出席に関する制度が改訂され<sup>41</sup>、1899年教育院法 (Board of Education Act) に基づき1900年には教育院 (Board of Education) が創設される。教育院総裁は、第7代デボンシャー公爵の長男で政治家の第8代デボンシャー公爵 (Spencer Compton Cavendish, 8th Duke of Devonshire, 1833-1908) が就任した。教

<sup>39</sup> E. W. Jenkins, op. cit., 1981, p. 34.

<sup>40</sup> R. J. W. Selleck, *The New Education 1870-1914*, London: Sir Isaac Pitman & Sons LTD, 1968, p. 129.

<sup>41</sup> <http://www.educationengland.org.uk/documents/acts/1900-elementary-education-act.html>, accessed 20 Nov. 2021.



育院は基礎学校、中等学校、工業学校の3部門を創設し、管轄する制度を確立させた。そして、農業教育委員会は、教育院総裁が第8代デボンシャー公爵であったことも幸いし、自然学習をイングランドとウェールズの1900年教育規程に位置づけることに成功した<sup>42</sup>。観察と活動、そして観察物の描画と説明という一連の活動を伴う自然学習は、新教育運動が掲げた理想に合致したのである。翌1901年には、博物館協会 (Museums Association) が創設され、最初の博物館ジャーナル (*Museums Journal*) が刊行された<sup>43</sup>。そして、リーズやシェフィールドの博物館の学芸員が、児童や生徒に自然学習の授業を開始するようになる。こうした動きは、ヒルがまさに環境保存のための国民的な運動に尽力していた時のことであり、同時に新教育運動初期のことであった。

続く1902年にはいわゆるバルフォアーモラント法 (Education Act, 1902) が制定され、基礎学校教育 (Elementary Education) の義務制、学務委員会の廃止、約300の地方教育当局 (Local Education Authority) の設立による改編がなされ、地方行政の全国的再編と中等教育改革によって教育行政の一本化が進んだ。基礎学校は確実に重要な国家的事業となったのである。ただ、それを統括する教育院は、中央集権的な方法をとるのではなく、教師の教授法の多様化に強力なサポートをする方向へと進んでいった<sup>44</sup>。それは「専門職としての教師」という自覚、教職アイデンティティ、職業認識の拡大において重要なスタンスであった。

---

<sup>42</sup> 安藤聡彦「一九〇二年夏、リージェンツ・パークーイギリス環境教育史断章」『一橋論叢』121(2), 1999, p. 229. この歴史解釈については、第一次史料を入手しさらに詳細に確認する必要がある。

<sup>43</sup> 博物館協会は現在も活動中である。詳細の情報は以下のリンクより入手できる。  
<https://www.museumsassociation.org/about/our-story/>, accessed 20 Nov. 2021.

<sup>44</sup> その嚆矢は『教師の学習手引書』(1905)であるが、このなかの自然学習の詳細についての考察は次稿に譲ることにしたい。

## 5. 自然学習展覧会・自然学習研究大会とゲディスの教育思想—自然学習／宇宙のドラマ／学校園—

では、20世紀に入ってからのゲディスは、どのような活動に動しんだのであろうか。自然学習を重視するゲディスの態度は、王立植物学会がロンドンのリージェント・パーク内の王立植物園で1902年7月23日から8月5日までの期間に開催した自然学習展覧会・自然学習研究大会（Nature-Study Exhibition and Conference）において強力に発揮される。大会講演と展示会の内容については、翌年、全314ページの報告書にまとめられて刊行され<sup>45</sup>、その内容は自然学習の重要性の確認、さらには推進といった点でイギリス全土に大きな影響を与えた。また、開催場所のリージェント・パークも歴史的な意味を有していた。なぜなら、1811年着工、1826年完成のリージェント・パークは、1838年に一般開放された王室庭園であり、これは建築家・ナッシュ（John Nash, 1752-1835）設計の郊外住宅地向けに作られたパークであるが、一般の人々に開放することを前提に設計された、初めてのものであったからである<sup>46</sup>。しかも、パークの開放を後押ししたのも、前述したエバズリー卿であった。この意味でリージェント・パーク自体にも歴史的・社会的意味が内包されていたことが窺われる。

さて、大会実行委員会で中心的な役割を果たしたのは、1899年10月に組織された農業教育委員会のメンバーであった。既に述べたように、彼らは第八代デボンシャー公爵が教育院総裁であった時の1900年教育規程において自然学習を教育規程に位置づけることに成功した実績を有している<sup>47</sup>。それゆえ、自然学習という教育内容が、自然科学への危機感だけでなく、農業の衰退への危機感から誕生したものであったということは容易に推察できる。つまり、これらの危機感が、新しい学習内容を学校教育に位置づけたことは、

---

<sup>45</sup> *Official Report of the Nature-Study Exhibition and Conference held in the Royal Botanic Society's Gardens, Regent's Park, London, July 23<sup>rd</sup> to August 5<sup>th</sup>, 1902*, Blackie and Son, Limited, 1903. 以下、本報告書はNSECと略記する。

<sup>46</sup> 佐藤昌『欧米公園緑地発達史』都市計画研究所, 1968, p. 33.

<sup>47</sup> 安藤, 1999, pp. 229 and 236.

カリキュラムにおける社会改革的視点の内包という点で等閑視することはできないのである。メンバーのリストには、ゲディス、社会思想家のウェルズ (H. G. Wells, 1866-1946) に加えて、新学校あるいはパイオニア校の一つであるビデールズ校の創設者で校長のバドレー (L. H. Badley, 1865-1967)、教育行政の観点から新教育運動に深く関与していた、教育院の特別調査委員会委員長のサドラー (M. E. Sadler, (1896-1966)、ロンドン・カウンティ・カウンシルの視学官のキミンズ (Dr C. W. Kimmins, 1856-1948) といった新教育運動家の名前が並んでいる<sup>48</sup>。また、この大会には、新教育運動初期に創設された新学校も自然学習の成果を出展し、その先駆性を示している<sup>49</sup>。さらにまた、アメリカやフランスなどからの展示や参加者もあり、教育史的にも、重要な記念すべき大会として位置づけることができる。展示総数は379件、カレッジや中等学校からの展示もあったが、最も多かったのは、公立・私立の基礎学校からのものであった<sup>50</sup>。それゆえ、この時期までに、自然学習が基礎学校でかなり普及していたことがわかる。

ゲディスの講演は7月24日になされ、それは、「自然学習のための施設(The Facilities for Nature-study)」というタイトルであった<sup>51</sup>。また、友人の博物学欽定教授のトムソン (J. Arthur Thomson, 1861-1933) の講演タイトルは、「博物学の季節学習 (The Seasonal Study of Natural History)」<sup>52</sup>、サドラーの講演は、「文化の基礎的要素としての自然学習 (Nature-study as an element of culture)」<sup>53</sup>であり、いずれも自然学習の重要性を強調するものであった。

では、ゲディスはどのようなことを論じたのであろうか。ここで彼の講演に光を当て、彼の主張を考察することにしたい。ゲディスは、まず、この展

---

<sup>48</sup> NSEC, pp. 299-303.

<sup>49</sup> たとえば、キング・アルフレッド校はネズミの生涯を展示して (NSEC, p. 40.)、賞を授与し (ibid., p. 20)、ビデールズ校は植物などの写真をどのように自然学習に生かしたかを展示して (ibid., p. 40)、賞をもらっている (ibid., p. 19)。

<sup>50</sup> 安藤, pp. 222-223.

<sup>51</sup> NSEC, pp. 111-124.

<sup>52</sup> Ibid., pp. 124-134.

<sup>53</sup> Ibid., pp. 276-278.

示会の内容に言及し、その成果を踏まえて、自然学習という科目が新しい科目ではないと次のように述べる。

本展示会の計画と領域、これらの大会の範囲は、それ自体すでに自然学習が過密な学習プログラムに押し込まれていく「新しい科目」ではない、ということの十分な証拠です。これは注目に値する兆候であり、強力な酵母 (a potent leaven) です。自然学習は、現在、順調に進められている教育規程 (codes) とプログラムを徹底的に変えるのです。<sup>54</sup>

彼は、自然学習が既存の教科内容を圧迫させる新しい科目ではなく、改訂された教育規程をよりうまく進めるいわばパンの種・酵母の役割を果たす、と述べているのであり、それは自然学習から様々な学習の展開可能性を示唆するものであった。そして、続けて、自然学習という科目が教育革新の一部だと位置づけて、次のように述べる。

自然学習は、明らかに昨今の教育革命 (the current educational revolution) の一部であり、自然学習を静的から動的 (kinetic) へと定義する者もいれば、分析から統合へと定義する者、さらに形式から生命・生活へと定義する者もいます。それは理科授業 (science-teaching) における新しい運動の到来であり、一世代前の実験室を備えた化学や物理の授業、あるいはそのワークショップを伴った最近の技術の (technical) 授業と同じくらい重要です。自然学習は、これらのどちらとも競合していないのですが、それらの両方を刺激し活性化するように運命づけられています。自然に対する新鮮な見方は、当然、自然のなかでのより重要な活動につながるのです。つまり、自然学習は職業 (occupations) へのより大きな適応度を生み出すのです。また、

---

<sup>54</sup> Ibid., p. 111.

これまでのリテラシーの学習 (literary studies) に対しても恐れるものは何もありません。自然の詩人になる準備が最も早くできているのは、子ども博物学者 (child-naturalist) なのです。さらに、文法学習にうんざりしている思春期の不登校の子どもが、ワーズワースあるいはテニーソン、ソローあるいはホイットマンの助けを借りて、〔ラテン語詩人の〕ウェルギリウス (Virgil) へと誘われるかもしれません。それはジェフリーズの牧草地を通して、またはラボックあるいはメーテルリンクと共にミツバチを見ることによってなのです。<sup>55</sup> ([ ] 引用者)

ゲディスは、自然学習を理科授業の発展として捉え、自然学習が抑圧的で強制的な学習ではないこと、また記憶を強いる学習ではないこと、そして自然学習が詩人や博物学への途につながることに言及し、その有効性を強調するのである。したがって、自然学習は、端的に、注入や暗記を強いる旧い教育ではなく、新教育の範疇に明確に位置づけられた学習であったのである。そして、さらに彼は教育内容の革新の意味と、それを限られた時間割に入れる意味を以下のように説明する。

それゆえ、一方での、言語学と人文科学の現代の復活の要求、他方での、科学的・地理的指導の最近の要求は、実際の「学習上の対立 (conflict of studies)」ではありません。それらは学習の完全性と調和へと回帰することなのです。完全性と調和は、ルネッサンスの真の文字通りのルネッサンスであり、ギリシアの栄光であった自然 (Nature) や人間 (Man) へと、生き生きした関心をまず変えることなのです。専門性 (specialisms) という明らかにややこしい路は筋道をつけられなければならない、教育内容の過密さの困難はうまく解決されなければなりません。後者は良い教育法によって、前者は学習の相関性によっ

---

<sup>55</sup> Ibid., pp.111-112.

<sup>56</sup> Ibid., p. 112.

てです。これらの両方の目的のために、自然学習と地理学は、特別に奉仕するのです。<sup>56</sup>

彼は、自然学習が「学習の完全性と調和」へ戻ることであり、その上で言語学や人文学の学習内容改革にとって自然学習が有効であることを強調し、日々の学習に自然学習を取り入れることが、様々な言語の習得において極めて重要な営みだと論じ、最後に学習方法とカリキュラムの相関性に言及するのである。つまり、ゲディスは、自然学習の重要性を主張するだけでなく、学校教育において避けて通ることができない教授法やカリキュラムに配慮するスタンスを採用する形で、自然学習の意義を論じているのである。彼の関心が教授法やカリキュラムといった教育行為に対しても大きいということは、この発言の後の彼の以下の言明にも表れている。

ここで、私たちは文字通り、ルソーの教え、ペスタロッチとフレーベルの業績の成果に取り組んでいます。ここに、文字通り、そして具体的に、最初に予言された「自然への回帰」があるのです。<sup>57</sup>

この発言は、自然や植物、さらに都市計画に強い興味を有していたゲディス像という理解を超える。なぜなら、彼の上述の言明は、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルといった大陸の教育思想家の教育思想に関して一定の知識を有していたことを示しているからである。この教育思想を踏まえた上で、ゲディスは、さらに教師に寄り添った態度をとりながら、自然学習をいかに学校教育で推進するかということに言及する。

ただし、私たち教師は、自然学習についてのより明確な定義を探さざるを得ないので、「人生の喜びのなかで最も永続的なものとしての観

---

<sup>57</sup> Ibid., p.112.

察」から始めるだけでなく、私たちが観察するのは単に印象の変化する饗宴の細かなものではない、ということを主張したいと思います。自然学習は実物教授の無限の資源 (source) ですが、私たちが目指しているのは、私たちが (個人的にも人種的にも同様に)、毎年、毎日、目覚めていく観察者 (awakening spectators) が有している宇宙のドラマ (Drama) の認識を広げ、深めることなのです。<sup>58</sup>

ゲディスは、実物教授の効果を熟知し、自然学習には実物教授のための無限の資源があると述べ、それは「宇宙のドラマの認識を広げ深める」ことだと、言明したのである。そして、この発言に続いて、「自然記録帳 (nature note-book)」を紹介し、それはやがて「地域調査」につながる、と発言する<sup>59</sup>。ここで彼が紹介している「自然記録帳」は、自然の本 (nature books) や自然日記 (nature diaries) を採用した「教育ハウス」という学校<sup>60</sup>や、シェフィールドの女子高等学校で実施している方法である<sup>61</sup>。これらの学校が出展した生徒の成果物は、極めて優秀だとして受賞している。そのため、彼は具体的な自然学習の進め方として「自然記録帳」を推奨したのである<sup>62</sup>。

こうしたスタンスに基づき、彼がさらに重視するのは、自然学習のための設備、すなわち「学校園 (school-garden)」である。彼は、大陸の国々やアメリカで学校園が多く設置されていることを紹介しながら、イギリスの学校には学校園がわずかしかないと言う。

中央当局が奨励することができ、教師と教育委員会が提供できるすべ

---

<sup>58</sup> Ibid., p. 114.

<sup>59</sup> Ibid., p.120.

<sup>60</sup> 「教育ハウス」は、シャロット・メーソン (Charlotte Mason) が1892年にアンブルサイドに創設した。これはヴィクトリア時代後期中流階級家庭が子どもの教育のために雇った女性の職業、すなわち、ガヴァネスになるための教授法を学ぶ学校である。メーソンの死後、1938年にシャロット・メーソン・カレッジとなる。

<sup>61</sup> *NSEC*, op. cit., p. 16.

<sup>62</sup> *ibid.*, pp. 19-20, 72.

ての施設のなかで、私は学校園をぜひともお願いしたい。学校の遊び場と風呂場、ワークショップと料理の部屋、美術館、研究所は、最初に「流行」し、次に贅沢に、次に便利に、そして最後に必要性というように、通常の発展段階をすべて適切に経ました。それゆえ、緊急に必要なものがまだ残っています。それは学校園です。学校の敷地やその他のすべての規程に満足していたフランスの教育者がかつてこの問題を取り上げたのはほんの数年前ですが、それ以降、フランスには現在33,000の学校 (communes) があり、それらのうち、28,000校に学校園があります。ロシアはそれに急速に続き8,000以上あります。ヴェルテンベルクやドイツのその他の地域、他の大陸諸国、アメリカ合衆国でも、学校園による自然学習の進歩は急速に始まっています。しかし、私たちの国は、そのすべての学校の学校園を合わせても、おそらくまだ100に満たない数でしょう。<sup>63</sup>

このように彼は学校園の設置の必要性を諸外国の進展状況と比較しながら論じる。そして、そのための補助金が不可欠である<sup>64</sup>、と主張するのである。「宇宙のドラマ」の認識を広げ深める自然学習は、実物教授という教授法に位置づけられ、自然の観察と共に、語彙や言葉の習得の獲得へとさらに広げられ、方法と目的の双方を充足させる道を実践にした。しかし、イギリスでは学校園という場の設置を欠いていると告発するのである。

彼のこの態度や教育思想は、まさに新教育思想そのものである。実は、ゲディスの旧教育批判は、キング・アルフレッド校の校長(ジョン・ラッセル)が1916年の「教育の新理想」年次大会<sup>65</sup>で講演した際の彼の発言にも表れている。ゲディスは、キング・アルフレッド校に息子を通わず親として、キン

---

<sup>63</sup> Ibid., p.121.

<sup>64</sup> Ibid., p.122.

<sup>65</sup> 「教育の新理想」については、拙著『イギリス新教育運動の生起と展開』の資料1「教育の新理想」(1914-1939)の年次大会<sup>65</sup>(pp. 505-530)を参照。

<sup>66</sup> *Report of the Conference of the New Ideals in Education, 1916*, p. 146.



グ・アルフレッド校理事会の前メンバーとして、またラッセル氏の旧友として、と付した上で発言するが、それは、記憶を確認するための試験がいかに人生の無駄であるか、定食ではなくアラカルトを食べることや自分が必要だと感じたことを勉強することがいかに重要であるか、という見解であった<sup>66</sup>。そしてさらに、彼は自らの恩師・ハクスリーの授業スタイルについても次の様に批判する。

私がトマス・ハクスリー教授のもとで数年間学んでいた時、ハクスリー教授は試験を実施しました。私はこれらの試験を受けましたが、その時、彼の言葉、描画、一定の知的観点を再生産しただけでした。私は科学的人間として麻痺してしまった、と感じたのです。私はハクスリーの蓄音機でした。そんなわけで私は彼の下を去り、海辺に行き、漁師のなかで過ごしたのです。その時、私の真の仕事とその伸展が始まったのです。<sup>67</sup>

ゲディスは、機械的な暗記中心の学習ではなく、自然のなかにある実物を介した自然学習の重要性を主張し、教育改革の必要性を強調したのである。

自然学習という用語に極めて強い光を当てた自然学習展覧会・自然学習研究大会は、その後の自然学習を方向づける歴史的意義を有した壮大なイベントであり、それは自然学習における歴史的ターニングポイントとなった事象であった。

## 6. 学校自然学習組合結成と自然学習運動の展開—むすびに代えて—

自然学習展覧会・自然学習研究大会は、その後、自然学習にどのような展開をもたらしたのであろうか。もちろん、これを契機に自然学習は大きく伸展する。というのも、1902年から1903年にかけて学校自然学習組合（School Nature Study Union）の結成に向けた動きが生じたからである。これを率

---

<sup>67</sup> *Report of the Conference of the New Ideals in Education*, 1916, pp. 147-148.

いたのは、東自然博物館 (East Nature Study Museum) の学芸員のクロード・ヒンスクリフ牧師 (Revd Claude Hinscliff) であった<sup>68</sup>。この組合は、1903年10月28日、ロンドンのケベル・ストリート図書館 (Cable Street Library) において、「相互の助け合いと助言のために、一般的に自然学習に興味のある人々やとりわけ教育における自然学習の位置に関心がある人々のために」<sup>69</sup> 結成された。そして、組合は『学校自然学習 (School Nature Study)』誌を刊行し、自然学習の教え方や有効な設備についての情報を多くの教師に伝え、サポートしていく役割を果たす<sup>70</sup>。もちろん、当時の教員は、教員養成カレッジ時代に自然学習の教え方についての訓練を全く受けていなかった。学校自然組合の唱道者の一人は、もちろんゲディスであった。自然学習は、いわば教育運動として展開され、学校教育の内容として確固たる位置を獲得することになるのである。

また、都市学についてのその後のゲディスの活躍もめざましく、それは学校教育における自然学習のオピニオン・リーダーという役割に留まるものではなかった。1903年、彼は国際的に影響を与えることになるカーネギー・ダンファームリン・トラスト<sup>71</sup>への報告書 (a report to the Carnegie Dunfermline Trust) を『都市の発展 (City development: a study of parks, gardens, and culture-institutes)』(Edinburgh: Geddes and Company) としてまとめ、都市計画論 (Philosophy of urban planning) を展開した。そこでは、子どもの活動空間の減少・変貌が都市の子どものひ弱さの原因であることが論じられた<sup>72</sup>。そして、彼は機械的な学校教育についても次のように厳しく

<sup>68</sup> E. W. Jenkins and B.J. Swinnerton, *The School Nature Study Union 1903-94, History of Education*, Routledge, 1996, vol. 25, no. 2. p. 181.

<sup>69</sup> Jenkins and B.J. Swinnerton, pp. 181-182.

<sup>70</sup> Joy Palmer, *Environmental Education in the 21st Century: Theory, Practice, Progress and Promise*. Routledge, 2002, p. 4.

<sup>71</sup> 現在はスコットランドのチャリティ組織として活動している。 <https://www.carnegiedunfermlinetrust.org.uk/>, accessed 30th Nov 2021.

<sup>72</sup> Patrick Geddes, *City Development*, Geddes and Company, Outlook Tower, Edinburgh and 5 Old Queen Street, Westminster, The Saint George Press, Bournville, Birmingham, 1904, pp. 11-12.

断罪する。

荒れた子ども (Hooligan) は、余りにも長い間、罰と抑圧によって取り扱われてきた。私たちは彼を主に私たちの機械主義の教育の産物、その石のパン (stony bread) で飢えさせた産物、と理解し始めている。それゆえ、女性庭師と自然主義者に、学校規程策定者と警官 (school-code maker and policeman) が有している公正な競争の機会を与える時がきているのである。<sup>73</sup>

さらにまた、1904年7月18日には、ロンドン大学のスクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティック・サイエンスで開催された社会学会での講演「都市学－応用社会学としての試み」<sup>74</sup>、翌年の1905年1月23日には、同所で開催された同学会での講演「都市学－具体性と応用社会学としての試み」<sup>75</sup>というように、新しい学問の領域に自らの調査に基づいた知見を次々と開陳していく。この頃、ヒルもまた救貧法王立諮問委員会の委員 (1905-1908) として、社会主義者のシドニー・ウェッブの妻、ベアトリス・ウェッブ (Beatrice Webb, 1858-1943) と共に社会改革運動の最前線に立って活躍し続けていた。このことは自然学習を学校で教えることを推奨するゲディスにとっては、重要な後ろ盾となったに違いない。

以上、本稿では自然保護運動や自然学習の背景を概括的に辿ってきた。ヒルやゲディスの社会運動は、オープン・スペース、コモン、ナショナル・トラスト、都市、地域調査、自然学習、進歩、さらには「宇宙のドラマ」といっ

---

<sup>73</sup> Ibid., p. 80.

<sup>74</sup> Patrick Geddes, 1905, *Civics : As Applied Sociology*, *Sociological Papers*, 1904 (1905), vo. 1, 103-118. ゲデス研究会訳「ゲデス第一報告」慶應大学三田哲学会『哲学』第114集, 2005, pp. 29-89. 本第114集は「特集：都市・公共・身体 of 歴史社会学・都市社会学誕生100年記念」として刊行された膨大な資料である。

<sup>75</sup> Patrick Geddes, 1906, *Civics : As Concrete and Applied Sociology*, *Sociological Papers*, 1905 (1906) : 57-111. 本講演録の邦訳としては青島耕平訳版がある。慶應大学三田哲学会『哲学』第114集, 2005, pp. 91-169.

た鍵的用語とそれらの包摂概念によって、人々の生活を豊かに享受する自然観を培い、それが自然を保護する態度や行動の日常実践の基盤を形成したのではないか、という次なる問いが出てくる<sup>76</sup>。今後は、自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する研究をさらに深化させるため、基礎学校に導入された自然学習にどのような学習内容があったか、教師たちはその学習をいかに取り扱ったかといった点を明らかにする必要がある。これらについては、次稿に期したい。

---

<sup>76</sup> その後、自然学習や環境学習は、1960年代になって環境教育と名称変更され、さらに今日のSDGsの伸展に継承されていく。他方、コモンに関しては、1964年にコモン登録法 (Common Registration Act) が制定され、一般の人々が慣習上、利用できるコモンの面積は100万エーカーに及び、レクリエーションの場所としてのコモンの価値は大きくなっていった。また、コモン・フートパス保存協会は、コモン・オープンスペース・フートパス保存協会 (Commons, Open Spaces and Footpaths Preservation Society) と名称を変え、今日では、オープン・スペース協会 (Open Spaces Society) として活動している。なお、今日のオープン・スペース協会の活動については、次のホームページを参照。

<https://www.oss.org.uk/about-us/>, accessed 15th Dec. 2021. なお、この協会の目的は、①誰もがコモン、緑地、歩道を楽しむためのより強力な保護と機会に向けたキャンペーンをすること、②オープン・スペースの損失や開発による抑圧から守ること、③地域社会が将来の世代が楽しむ緑地を守ることができるように支援することにある。また、1991年の資料によれば、グレーター・ロンドン内にある公共の公園や広場の総面積は1万7千ヘクタールを超え、それをグレーター・ロンドン内の人口680万人で単純に割ると1人当たり約25m<sup>2</sup>に相当する広さになる。一方、日本では、都市部における1人当たりの公園面積は5.8m<sup>2</sup>であり、ロンドンと比較するとおよそ4分の1に過ぎない劣悪な状況下にある。また、ロンドンの公園数は1エーカー以上のものだけでも約1,700を数え、公園を初めとする公共のオープン・スペースの広さは45,000エーカー以上あり、それはロンドンの全面積の11パーセントに相当する。この点で自然保護の思想は、今なおしっかりと継承されていることがわか。

(財)自治体国際化協会 (Council of Local Authorities for International Relations = CLAIR) 『ロンドンの公園とオープン・スペース』 *CLAIR Report*, Number 024 (28<sup>th</sup> Feb. 1991)

[http://www.clair.or.jp/j/forum/c\\_report/pdf/024-1.pdf](http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/pdf/024-1.pdf), accessed 18th Dec. 2021.



# 方言雑考—九州、西日本を中心として

柴田清継

## はじめに

一口に日本語といっても、各人各様であり、各時代各様であり、各地各様である。日本語話者が日本語をどのようなものとして受け止めるかということもまた、各人各様であり、各時代各様であり、各地各様であろう。日本語像というものは、この言語にかかわった人の数だけあると言っていいだろう。

本稿は、次に記すような人生を送って来た筆者がそれぞれの時期にその中に包まれて暮らしてきた、もしくは日々親しく接してきた言語を、現在の時点で振り返り、筆者とそれらの言語との関係、あるいは筆者のそれらの言語に対する見方・印象などを記述してみようとする試みである。

日本語の話者とか、日本語に多少なりともかかわって来た人は、これまでどれくらいいたのだろうか。その数千億人（あるいはそれ以上）の中の一人が抱いていた日本語像のつたない記述として、お読みくださる方の何らかの参考になればという思いで、書かせていただくことにする。

## 筆者の生い立ち・経歴

筆者は1952（昭和27）年の晩秋、長崎県の佐世保市で生まれた。一緒に暮らしていた祖父は県内の五島の生まれで、九州本島に来て働くようになってから、佐賀生まれの祖母と結婚したらしい。この祖父母の長女が私の母で、祖父の勤めの関係で長崎市にも住んでいたことがあったようだが、終戦前から佐世保市の中心部で暮らしていた。父は婿養子で、佐世保市の南に隣接する東彼杵郡波佐見町の人だった。筆者はそのような家族と共に暮らして大きくなったが、高校三年の時に大学受験をするまで、九州から出たことがなかった。長崎県外へ行ったのも、祖母の実家のある佐賀への小旅行と、小・中学校の時の福岡・熊本・大分県への修学旅行ぐらいで、大阪の大学に入学する

18歳5か月の時まで、ほぼ99%の日々を佐世保市の中で過ごした。

そんな、言うならば「佐世保市純粹培養」の私がおの、大学入学と職場勤務の関係で、大阪市に4年間、広島市に4年間、香川県高松市に9年間、兵庫県神戸市に33年間（継続中）、暮らしてきた（兵庫移住後の5年目は、中国の北京市で1年間暮らした）。

## 佐世保方言

上述の通り、筆者は大学入学前まで、99%の日々を佐世保市の中で暮らし、学校の授業で先生に当てられて本読みをするときぐらいしか、いわゆる標準語というものを口から発することはなかった。先生もほとんどの人が方言交じりか、方言丸出して授業をしていた。今でも高校の国語の先生が一通り説明した後で発する「よかですか」（「いいですか」の意）という決まり文句や、校内の呼び出し放送で流れる「〇〇シェンシェイ（先生）、職員室にお戻りください」が耳によみがえってくる。そんな環境の中にどっぷりつかっていたから、たまに異なる地域から来た人に標準語めいた言葉で話しかけられたりすると、返事の言葉がすんなりとは出てきにくかった。それも地元での会話なら、多少変な標準語で答えてもおかしくはないだろうと思えるのだが、アウェーでの会話となると、やはりできるだけ訛りが出ないようにと緊張してしまうのである。そのような緊張が大学受験の時から日常的に始まったわけである。

自分で言うのも何だが、筆者は外国語大学に進学したぐらいだから、言葉に関することは割と器用な方だったろうと思う。だから、あまり失敗したことはないはずだ（アクセントやイントネーション以外では）が、佐世保方言を標準語に切り替える際、気持ちの上では抵抗を感じる言い回しなどがいくつかあった。それがどのようなものであったか、思い出すために、試しに「吾輩は猫である」の冒頭の一節を佐世保弁に翻訳して、書いてみたい。

おいは猫ばい。名前はまだなか（A）。どこで生まれたと（D）か、全然見当の（B）つかん。どっか薄暗か（A）じめじめしたところで

ニャーニャー泣いとったことだけは記憶しとる（※）。おいはそこで初めて人間ていうもんば（C）見た。そいも後で聞いたら、そいは書生ていう人間の中で一番<sup>どうあく</sup>癡悪か（A）種族やったらしか（A）。この書生ていうと（D）は時々おいたちば（C）捕まえて食うて（G）いう話たい。ばってん（E）、その当時（※※）はなんも考えの（B）なかったけん（F）、別にえすか（A）ても思わんやった。ただ、そいの手のひらに載せられて、スーッて持ち上げられた時、なんかふわふわした感じの（B）あっただけたい。手のひらの上（※※）で少し落ち着いて書生の顔ば（C）見たと（D）が人間ていうもの見始めやろう。こん時（※※※）妙な（a）もんばいて思うた（G）感じの（B）今でん残っとる（※）。

だいふ思い出せた。A：形容詞や形容詞型の活用をする言葉（助動詞の「らしい」など）の終止形と連体形は「い」ではなく、「か」で終わる。では、佐世保方言では、形容詞と形容動詞の区別はないのかと言えば、そうとも言い切れない。活用形の一部で違いが出てくる。「高か」を形容詞の例として、活用形を書き出してみよう。

未然形：たかかろ（う）      連用形：たかかっ（た）、たこう（なる）  
終止形及び連体形：たかか      仮定形：たかかなら

これに対し、標準語の形容動詞に相当するものとして、「元気か」の活用を考えてみると、次のようになる。

未然形：げんきやろ（う）      連用形：げんきやっ（た）、げんきに（なる）  
終止形及び連体形：げんきか      仮定形：げんきかなら

基本形は「～か」で終わる同じ形だが、未然形と連用形に違いがある。なお、最後のa印の「妙な」は、佐世保方言では連体詞に分類すべきではない



かと思う。「妙か」という形がないからである。「妙に」という形はある。これは副詞ということになるだろう。標準語の「妙だ」に対応するのは「<sup>へん</sup>変なか」ではないかと思われる。「吾輩」原文の「妙な」のままでも差し支えないので、そのまま使ったが、「変なかもんばい」と訳してもよかった。

B：主格を表す格助詞としては、「の」を使うことが多い。しかも、標準語の「君言うことは分かるよ」の「の」のように、従属句の中の主格を示すだけでなく、言い切り文の主語を示すのにも使うのである。佐世保方言では主格を表すのに、「の」と「が」が使い分けられている。上の「吾輩」の訳文のうち、「ふわふわした感じの」「妙なもんばいて思うた感じの」の「の」は、原文では「が」であるが、佐世保方言では「の」でないと、落ち着かない。「書生の顔ば見たとが」の「が」は原文のままである。「吾輩」で、この後出てくる「が」のうち、「の」に置き換えなくても済むものはないかと、一つ一つチェックしてみたところ、10例目の「第一に逢つたのがおさんである」（おさんはお手伝いの女性の名）に至って、やっと見つかった（佐訳すれば、「最初に逢うとが<sup>お</sup>おさんたい」）。主格を表すのに「の」と「が」で、どう違うのかと言われると困ってしまうが、「だいが行くと？」「おいが行くばい」（「誰が行くの？」「俺が行くよ」の意）のように、主格として表される人間や物を取り立て、引き立てて表現する場合に「が」を使い、その他の場合は「の」を使うという説明ぐらいしかできない。とりわけ、「雨の降いよっ」（雨が降っている）のように、主格として表される人間や物の意志や作為と関係なく起こったり行われたりすることである場合には、「の」しか使えないと言っていいように思われる。

『日本国語大辞典』の格助詞の「の」の項<sup>1</sup>を調べてみると、五つに分けられた用法のうちの四番目が「主格を示す助詞」となっており、さらに次のように細分されている。

①④従属句や条件句など、言い切りにならない句の主語を示す。

<sup>1</sup> 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版』第十巻（小学館、2001年）754-755頁。

㊸連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。

㊹言い切り文の主語を示す。

②好悪の感情や希望・可能の対象を示す。

煩瑣になるので、①㊹の「言い切り文の主語を示す」のみに焦点を絞ることとする。この用法については、「語誌」として次のような説明が付加されている。—「①㊹の用法は中古仮名文に現れ、近世にはかなりの例が見られるが、助詞「が」のように自由な主格助詞となり切ることではなく、後には再び衰退する。(中略)近世の例はすべて感動表現であって本質的にはやはり㊸㊹の用法と同様である。」なお、①㊹に挙げられている近世の例は一つだけで、『滑稽本・浮世風呂』の「なんだ気のきかねへ」である。以上のような日本語史のメインストリームから見ると、何の変哲もない言い切りの平叙文でも「の」によって主格を示す佐世保方言は、かなりユニークな存在だということになるのではないだろうか(実は後述の肥筑方言全体に通じる性質だと思われるが)。ちなみに、沖縄方言にも主語につく助詞として「ヌ」(ヤマトの「の」に相当)と「ガ」があり、西岡敏・仲原穰著『沖縄語の入門』では、「ガ」は「主語が人であるとき、代名詞のときに用い」、「ヌ」は「主に一般名詞のときに用いる」とされている<sup>2</sup>が、佐世保方言における「が」「の」の使い分けとはやや異なるようである。

C：標準語の「を」に当たる助詞として「ば」を使う。佐世保方言だけの生活では「を」は、通常発音する必要のない、バーチャルな音声である。これを発音するのはほぼ学校での本読みの時くらいで、筆者は「を」を「wo」と発音していた。

D：標準語の準体助詞や終助詞の「の」にほぼ相当するものとして、「と」を使う。ほかの文例も挙げておこう。

---

<sup>2</sup> 西岡敏・仲原穰著『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチー』(白水社、2000年) 13-14頁。

リングはあっかとかうまかよ。(リングは赤いのがおいしいよの意。  
なお、これは「赤い」を取り立てる表現だから、「が」が使われている。  
なんばしとったとね？(何をしてたの？の意)

高知や北陸の方言では、標準語の準体助詞や終助詞の「の」に相当するものとして「が」を使うようだが、それに似ている。

E：逆接の接続詞として「ばってん」を使う(「ばってん」は、「うまかばってん、高かしたい」のように、逆接の接続助詞としても使う)。

F：原因・理由を示す接続助詞として、「けん」を使う。

その他、音便にも触れておかねばならない。特に、「吾輩」訳文中にも二か所ある(G)ウ音便である。「はやく」が「はよう」、「うれしく」が「うれしゅう」のように、形容詞の未然形・連用形、「思った」が「思うた」、「誘って」が「誘うて」のように、ワ行五段活用の動詞の連用形の「～た」・「～て」に続く形は、それぞれウ音便化する。また、上記「吾輩」訳文中の※印の個所は、「記憶しとっ」・「残とっ」と発音したりもする。これは促音便ということになる。特にこれに助詞が後接する時は、促音便化することが増えるようである。例えば、「記憶しとっ」・「残とっけん」など。「キットカット」という商品名を見聞きすると、九州弁を連想すると、東京出身の人に言われたことがあるが、この辺りのことに起因するのだろうか(ただ、「キットカット」は、鹿児島方言なら、「きつと勝つぞ」といった意味になるのかもしれないが、佐世保弁としては意味をなさない)。その他、上記訳文中の※※印の個所は、「そんな時」・「手のひらん上」と発音したりもする。撥音便ということになるのだろうか。※※※の「こん時」は「この時」でもいいのだが、「こん時」の方がややポピュラーな感じがしたので、こうした。

細かいことまで挙げていけば、まだいくらでもあるが、本州上陸後は、これらの言葉を標準語に置換して話すよう心掛けてきた。ただ、そんな話し方をしていると、最初のうちは、自分が自分でないような感覚が常に付きまっていた。この感覚を裏返して言えば、私から見ると、佐世保方言の中でも、

特に以上に取り上げたような点は、切っても切り離せない不可欠のエッセンスのような部分だということになるのだろう。

### ドラマ・小説等の話し言葉の違和感

ここまで佐世保方言に絞った形で話をしてきたが、佐世保方言は長崎方言の一つであり、さらに肥筑方言の一つとしても位置付けることができる。以下、そのように視野を拡大して、話を進めていきたい。肥筑、すなわち佐賀県・長崎県・熊本県及び福岡県西部の方言は、細かい違いを含みつつも、以上に取り上げたような言葉遣いはすべて共通しており、一つの大きな方言地域を形作っている。福岡市地下鉄やJR九州のICカード乗車券、「はやかけん」や「SUGOCA」、特に前者は地域の方言の特色を盛り込んだ巧みなネーミングだと言えよう（もっとも、形容詞基本形の「～か」という形は、九州全域をカバーしているわけではない）。

さて、この肥筑地方を舞台としたテレビドラマ・映画・小説等は、枚挙にいとまのないほど制作されてきたのではないかと思われるが、それらを観たり読んだりした時に登場人物の話す言葉に違和感を覚えなかったことはほとんどない。

最近の例の一つ挙げることにしよう。第11回親鸞賞に選ばれたということで新聞で紹介されていた<sup>3</sup>朝井まかて氏の小説「グッドバイ」（朝日新聞出版より刊行）に出てくる長崎弁に関することである。この小説は「幕末に長崎で茶の貿易に乗り出した女性商人」を主人公とするもので、「登場する人々は、日本人も外国人もみな長崎弁を話しており、作者も「オランダ人もイギリス人もアメリカ人も、彼らが最初に接した言葉は長崎弁であろうと、そう思って、なまらせた」と言い、「言葉はなまもので、生きている。今の作家が使わなければ、どんどん化石化してしまう。積極的に、意図的に使うことで、その言葉がもっていた魂を今に伝承していけたらいいな」と作者が意欲をのぞかせたものだと紹介されていたので、筆者は「長崎弁の魂がどの

<sup>3</sup> 『朝日新聞』（大阪本社）2021年1月27日朝刊13面。

ように表現されているか」という点に興味を抱き、直ちに購入して読んでみた。

期待外れだった。例を挙げよう。以下、「→」の右側に筆者が想定する標準的な長崎弁を記すことにする。

まず、上記Aの形容詞の終止・連体形の「～か」に関しては、あまりミスがないが、やはり下記のような例が挙げられる。

1. 上物の濃いお茶を～→上物の濃いかお茶ば～（9頁）
2. ええお茶を→よかお茶ば（10頁）
3. ええか、大浦屋しゃん→よかね、大浦屋しゃん（30頁）

1の「濃いか」は変則的な形で、確かに難しい。ただ、2・3の「ええ」は、筆者には筆者自身が大学入学後移り住んだ関西や中国四国地方のムードを感じさせる言葉で、長崎弁としては興覚めである。

上記Bの主格を表す格助詞に関するもの。

4. 申し訳が立たんばい→申し訳の立たんばい（13頁）
5. 女将しゃん、船が来ました→女将しゃん、船の来ました（15頁）
6. 顔役の引きがのうては→顔役の引きのなかぎん（32頁）

補足：6の「ぎん」は、「～なら」と仮定を表す助詞で、連体形に接続する（ただ、主に長崎県北及び佐賀県の一部で使われる語で、長崎県南の長崎市ではあまり使われないかもしれない）。

上記Cの、標準語の「を」に当たる助詞としての「ば」に関するもの。1、2の用例にも含まれているが、さらに、

7. 私を信じてたとやろかね→私ば信じとったとやろかね（11頁）
8. ご先祖のように、海の外の物を扱う商いがしてみたか→ご先祖のごと、海の外の物ば扱う商いばしてみたか（19頁）

補足：7の原文には尊敬表現の要素は入っていない（「信じておられた」とか「信じていらっしゃった」とかいった言い方にはなっていない）が、訳文は「信じとらした」としてもいいのではないかと思う。自分と同輩以上の、特別に親しくはない第三者の行為・心情等を表現する動詞の場合、たとえその人を尊敬していなくとも、尊敬の助動詞を付けて表現するのが普通である（主語を明示する手間を省く等の効用があるのだろう）ような気がする。五段活用の動詞ならその未然形に「す」、上一段・下一段・カ変の動詞ならその未然形に「らす」を付ける。サ変「する」については、活用するのではなく、「さす」という形を使う。「信じとらした」の場合、「す」の連用形の「し」が使われている。8の「が」は多少の違和感を覚えたので、「ば」に置き換えた。また、ここで初めて指摘するが、「～のように」は「～のごと」としなければ、かなりの違和感を漂わせてしまう。「ごと」は肥筑方言のエッセンスの一つと言ってもよい助詞である。

上記Dの、標準語の準体助詞や終助詞の「の」にほぼ相当するものとしての「と」に関するもの。

9. お具合の悪いのではなかとですか→お具合の悪かとではなかとですか（23頁）
10. その務めを担っておるのは、誰か。そう、町年寄を筆頭とする長崎の地役人ばい。→その務めば担うとるとは、誰ね。そうたい、町年寄ば筆頭とする長崎の地役人たい。（29頁）
11. そのために待とったんやけん→その（or そん）ために待とったとやっけん（15頁）

補足：10の波線を付けた最初の個所は音便の誤り。10は主人公の女性のセリフである。女性はよほどの場合でない限り、疑問を発する際、「～か」という言い方はしない。二つ目の波線の個所を「誰ね」と直したのは、そのため。11の「ん」は「の」の撥音便であるから、ここに属させた。なお、よ

く文末に使われる「たい」と「ばい」の使い分けは、微妙な問題で、筆者の内省だけでは説明しきれない。

上記Eの逆接の接続詞「ばってん」に関するもの。

12. 気易う言うが、いったい誰を相手に掛け合いすると→気安う言うばってん、いったい誰ば相手に掛け合いばすると (27頁)

上記Fの原因・理由を示す接続助詞「けん」に関するもの。

13. テキストルしゃんは横浜に詳しかから、いろいろ教えを請うと言うたでしょう。→テキストルしゃんは横浜に詳しかけん、いろいろ教えば請うて言うたでしょう。(316頁)
14. 面倒見のよか人やったからねえ。→面倒見のよか人やったけんねえ。(329頁)

なお、この「けん」は、標準語の「それ」に当たる「そい」を冠し「そいけん」となって、接続詞としても使われる。次の15などは「そいけん」を使うべきところである。

15. ここに手えば突っ込んで何か変えようと思うても素人には何あんもわからん。ゆえに、御老中の手が出せぬというわけばい。→ここに手ば突っ込んで何か変ゆうて思うたっちゃ素人には何もわからん。そいけん、御老中の手の出せんていうわけたい。(29頁)

「ゆえに」は日本のいずれの地域においても庶民が日常使うような言葉ではないだろう。また、「手」を「テエ」と長音化して発音すると、筆者には関西弁のような雰囲気を感じられてしまう。

その他、ここで初めて指摘するが、標準語の「こんな」「そんな」等の指示系列の言葉に相当する長崎地方の言葉を示しておこう。

- 「こな」→「こがん」または「こげん」  
「そん」→「そがん」または「そげん」  
「あんな」→「あがん」または「あげん」  
「どん」→「どがん」または「どげん」

ちなみに、筆者が見聞した範囲でいえば、肥後では「こぎゃん」、「そぎゃん」、「あぎゃん」、「どぎゃん」になり、安芸では「こがいな(に)」「そがいな(に)」「あがいな(に)」「どがいな(に)」になるようである。以上のような指示系列の言葉の誤用個所を挙げておこう。

16. そんなことで→そが(げ)んことで(14頁)  
17. そんなこととして、お仕置きば受けんかったと→そが(げ)んことばして、お仕置きば受けんやったと(17頁)  
18. いっその仲間で仕入れたらどうですやろう→いっその仲間で仕入れたらどが(げ)んですか(27頁)

18の原文も、筆者にとっては関西弁のようなムードの漂ってくる言い回しである。

その他、「大きい」という形容詞は、「い」を「か」に換えれば長崎弁になるというものではなく、「ふとか」を使うのが標準的である。直すべき用例を挙げておこう。

19. こげん大きかもんですか→こげんふとかもんですか(16頁)  
20. ほんに、大きかあ→ほんなこて、ふとかあ(19頁)

筆者は「グッドバイ」を読みはじめてまもなく、話の筋よりも、会話文の違和感が肥大化してきて、修正を施しながら読み進めたため、全357頁の至るところ書き込みだらけになってしまった。だから、例を挙げ続ければきり



がないので、ここでやめておく。

これまでに読んだ小説や見たドラマ・映画の中で、最も完璧な肥筑方言を使っているなと思ったのは、NHKの朝ドラ『おしん』（1983年）で田倉商会の従業員役を演じた今福将雄（1921-2015）の佐賀弁である。この人は寅さんシリーズの『男はつらいよ ぼくの伯父さん』（山田洋次監督）でも佐賀在住の老人役を演じていたが、それも完璧だった。調べてみると、今福将雄は福岡県飯塚市の出身で、もう少しで豊前に入るが、ぎりぎり筑前地域の生まれである。なるほどと思った。その他、これまた山田洋次監督の『家族』で長崎県伊王島から息子夫婦の北海道移住についていく老人を演じた笠智衆（1904-1993）の長崎弁も完璧だったと言ってよい。この人も熊本県の玉水村（現玉名市）の出身で、当たり前と言えば、それまでだが。

### 形容詞とワ行五段活用動詞の連用形のウ音便

筆者が佐世保方言、ひいては肥筑方言のエッセンスととらえた語法のうち、その後筆者が経めぐった中国・四国・近畿地域でも共通して見られたのは、形容詞の連用形とワ行五段活用動詞の未然形・連用形のウ音便だけである（共通項は、中国・四国に絞れば、原因・理由を言うときの「～けん」も加えることができるが）。

筆者は1971年から4年間、近畿地方（大阪市内）で学生生活を送り、その後、13年間、広島・高松で暮らした後、1988年から現在に至るまで再び近畿地方（神戸市に居住）で暮らしている。1988年に近畿に戻って来て以来、30年以上住み続けているが、この地域の言葉がしだいに変化してきていることが感じられる。

筆者が最も強く感じているのは、ウ音便の使われる度合いの遞減である。ウ音便と言っても、ここでは「頼んだ」（これは撥音便だが）が「頼うだ」となるのや、「かぐわしい」が「こうばしい」となるのなどまでは含まず、形容詞の連用形とワ行五段活用動詞の未然形・連用形のウ音便（以下、この種のウ音便を約めて「ウ音便」と称することにする）に限定することにする。話し手の年代にもよるだろうが、最近では、「言うて（と）んねん」より「ゆっ

てんねん」、「思うて（と）んねん」より「思<sup>ゝ</sup>ってんねん」、「買<sup>ゝ</sup>うて（と）んねん」より「買<sup>か</sup>ってんねん」の方が多数派になっていること、間違いない<sup>4</sup>。

伝統的な関西弁のエッセンスと言ってもいいと思われる上方落語の文字起こし資料の中から、『初代桂春団治落語集』<sup>5</sup>（初代桂春団治の生卒年は1878-1934）を調べてみたところ、「使<sup>つ</sup>うても」とか「重<sup>つ</sup>うなって」とかに混じって、「樺鱈食<sup>て</sup>」とか「アホらし<sup>な</sup>なって」とかのように、「ウ」の抜けた音便も出てくるのであるが、400頁を超えるその本の中、形容詞の連用形とワ行五段活用動詞の未然形・連用形で促音便化しているものは一つも見当たらなかった。桂米朝（1925-2015）についても同様な結果だった<sup>6</sup>。

では、いつごろから本来ウ音便だったものが促音便に変移するようになってきたのだろうか。筆者に可能な範囲で調べてみたところ、かつて武庫川女子大学の学長を務められた山本俊治先生（2020年逝去）が1969年に武庫川女子大学文学部に入学した、大阪方言地域を出生地・成育地とする学生100名を被調査者として、大阪方言についての調査をしてまとめられた「女子学生にみられる大阪方言の動態」という論文<sup>7</sup>のあることを知った。どのような調査方法が採られたのかという点が分明的でないが、ウ音便に関する調査結果の記述だけ挙げるなら、ワ行五段動詞について「女子学生のことばについてみると、ウ音便現象をおこす場合が多いとはいえ、共通語的に促音便現象をおこす場合もかなり多い」（163頁）、形容詞の連用形においても「女子学生のことばでは、ウ音便とならんで、『～ク』形もかなりみられる」（168頁）、そして「一般に（調査対象にした100名の女子学生における一般という意味

<sup>4</sup> 最近出版された真田信治『関西弁事典』（ひつじ書房、2018年）の「音声」の項（岡田祥平氏担当）にも、動詞の場合と形容詞の場合について、それぞれ「若年層では、ウ音便の形を使用しつつも、標準語と同じ促音便の形を使用する人も増えているともいう」、「大阪弁の形容詞に観察されるウ音便は、若年層では衰退する傾向にあるし、高年層であっても改まった公の場では観察されにくい」との指摘がある。

<sup>5</sup> 東使英夫編『初代桂春団治落語集』、講談社、2004年。

<sup>6</sup> 桂米朝『上方落語 桂米朝コレクション7 芸道百般』（筑摩書房、2003年）を調査した。

<sup>7</sup> 山本俊治「女子学生にみられる大阪方言の動態」、藤原与一編『方言研究叢書』5（三弥井書店、1975年）所収。

に解せられる一筆者)ワ行五段の促音便現象がさかんで、そのような言いかたに共通語的な言い方を感じているようだ」(243頁)と報告されている。1969年と言えば、筆者が大阪で暮らし始める3年前で、遅くともそのころにはすでに促音便が勢力を拡大し始めていたことになる。

西日本方言と東日本方言を分ける最も重要な要素の一つとも言えるようなウ音便の促音便への移行という現象を、どうとらえればいいのだろうか。全国的に進行している方言の共通語(標準語)化現象の一環ということになるのだろうか。私事ながら、筆者は近年、愛知県西部、特に名古屋市を訪れることが時々あるのだが、電車に乗っている時などに周りの人たちから聞こえてくる言葉にほとんど地域の特色が感じられないことに、逆の意味での「違和感」を覚えている。かつての名古屋弁タレント南利明(1924-1995)や現在の河村たかし市長が話すような名古屋特有の言葉や言い回しが全くと言っていいほど聞こえてこず、東京の言葉とほぼ同じなのである。以前はもっと地域の特色があったはずなので、現状のように変化してきた原因・背景について切に知りたいと思うが、そのような名古屋の人たちの会話と比べてみると、関西で聞こえてくるのは、古今の多少の変化はあるものの、標準語とは異なるイントネーションで発せられるいかにも「関西印」の言葉ではある。

そのようなことも頭に浮かべつつ、さらに調べてみたところ、高木知恵氏の「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」<sup>8</sup>という論文に巡り合った。高木氏は1993、1996、1997の三ヶ年に関西在住の若年層35組の二人一組の会話約18時間分を収録し、これを資料として、その当時の関西若年層の話し言葉の実態について、四つの項目<sup>9</sup>を立てて、それぞれ詳細な報告と分析を行っておられる。そして、動詞・形容詞音便形の使用実態については、「ワ行五段動詞におけるウ音便形・形容詞音便形は若年層ではあまり使われ

---

<sup>8</sup> 高木知恵氏「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」、『阪大日本語研究』別冊2、2006年。

<sup>9</sup> 四つの項目とは、否定辞(第5章)、東京語の「～ジャナイ(カ)」の取り込み具合(第6章)、動詞・形容詞音便形の使用実態(第7章)、東京語の間投助詞「サー」の取り込み具合(第8章)である。

ず、標準語形が優勢であった」と報告され、「若年層関西方言の活用形については、方言形から標準語形への移行が完成しつつある段階にあるとみることができ」、ワ行五段動詞においては「標準語と方言の対応を複雑にしているウ音便形を使わないことでその複雑さを解消するというメカニズム」が働き、形容詞については「『標準語の語形変化規則にないものは排除する』という非常にシンプルなメカニズム」によっているとの見解を示しておられる(131-132頁)。また、これらの音便形の使用については、男性の方言使用率が女性よりも高いという「かなり明確な男女差」があり、この点については「一般に、男性は標準から逸脱する形式に威信を感じ、女性は標準的なものを志向する傾向があるといわれるが、今回の結果もそれに沿う形となった」と述べておられる(133-134頁)。

高木氏によれば、標準語との接触によって関西方言の中で起こった語法的な面の変化と比べて、音声の面、すなわちアクセント面の変化は小さくなく、アクセントが若年層が自らの言葉を「関西の方言」と認識できる「方言メーカー」となっているとのことである(168頁等)。総じて、高木氏の当時の関西方言に対する総合的な見方は、「標準語との接触によって変容しつつあるが、それは、方言が標準語に取って代わられる『言語交替』のプロセスではなく、標準語を取り込みながら方言体系を整合性のあるものへと再編成してゆく『接触方言の形成』のプロセスにおいて理解されるべきものである」というものである(195頁)。

高木氏のおかげでウ音便の衰退について理解を深めることができたが、関西弁らしさを維持しようと思うなら、ウ音便はかなり重要な要素であるはずなので、なぜそれが淘汰されつつあるのかという疑問は筆者の中から消えない。筆者個人の感覚だけに基づいた言い方になるかもしれないが、促音便が軽快な感じがするのに対し、ウ音便には時として古めかしい、鈍重な感じがある。時代劇で殿さまが「苦しゅうない。近う寄れ」と言ったり、お姫様が「お花が大そう美しゅうございます」と言ったりする場面(本当に殿さまやお姫様はそのような言い方をしていたのかどうかは知らないが)を思い浮かべればいい。数十年前テレビで放映されていた「まんが日本昔ばなし」のナ

レーション（老人の語り）にもウ音便がよく出て来たような気がする。ウ音便が忌避されるようになってきているのには、そのような面もあるのではないかと、筆者は常日頃感じている。

### ウ音便の徹底しがたさ一余説

ところで、以前、「薩摩スチューデント、西へ」<sup>10</sup>という幕末、薩摩藩の命を受けて英国に留学した若者たちのことを描いた林望氏（1949-）の小説を大変興味深く読んだことがあるが、気になったのは、登場人物の話す言葉の中でのウ音便の不徹底だった。「町田どんか、いや、香港ちゅうところは、どげなところかと思っちゃったとでござす」といったように、全体的には薩摩の雰囲気満載の話し言葉の中に、「思っちゃった」という促音便が出現して、やや興覚めの感があったのである。大まかな印象だが、この作品では、ウ音便であるべきところでちゃんとウ音便になっているのは2～3割で、「こりやまっくて臭くてたまらん」のように、ウ音便化していないものが大勢を占めていた。

作者の林望氏は東京のご出身なので、作中の話し言葉の薩摩方言化はこの言葉のネイティブか、または詳しい方に依頼されたのだろうと推察されるが、最終的な原稿は作者の手で作成されるから、徹底せぬまま脱稿されたのかもしれない。そのような気がしたので、それなら、鹿児島県で生まれ育った人の書いた小説はどんな様子かと思って、大口市生まれで18歳まで鹿児島県で育った海音寺潮五郎（1901-1977）が薩摩武士のことを書いた「唐蕃武士」という短編<sup>11</sup>を読んでみた。ウ音便になるべき個所13か所のうち、2か所がウ音便になっていなかった。「笑う貴<sup>おはん</sup>下達<sup>だ</sup>が間違っていやせんか」と「よく考えてみるがよか」である。

海音寺潮五郎も東京に出てからは長い間、故郷から離れていたようなので、無意識のうちにこのような標準語的な言い方が混じって来たのではなかろう

<sup>10</sup> 林望「薩摩スチューデント、西へ」、光文社、2007年。

<sup>11</sup> 石田忠彦編、ふるさと文学館第五三巻【鹿児島】（ぎょうせい、1994年）所収。

かと思われる。そして、林氏の作品のことも含めて考えてみると、文章を書く際の規範は標準語を対象として立てられているため、筆を執って書いていると、知らず知らず標準語的な言い方に干渉されてしまうということがあるのかもしれない。

往年（ウ音便がちゃんと使われていた時代）の西日本を舞台にした映画・テレビドラマ・文芸作品などの話し言葉において、ウ音便を徹底するというのはかなり困難なことのように見受けられる。筆者が2021年に見たテレビドラマ「あぐり」（1997年4～10月に放映されたNHK連続テレビ小説の再放送）は、主人公の出身地が岡山で、岡山弁のセリフがたくさん出て来たが、促音便が手を振ってまかり通っていた。つい最近放映された大阪が舞台の「女系家族」（テレビ朝日、2021年12月4日、5日）は、ウ音便が結構しっかり守られているなと感心しつつ見ていたが、結末に近くなったところで、番頭大野宇一（奥田瑛二氏が演じた）の口から「誓って…」という言葉が発せられたので、ちょっと白けてしまった。

## おわりに

薩摩の言葉は、薩隅方言に属し、同じ九州方言の中でも肥筑方言とは異なる分類をされており、筆者も実は必ずしもよく分かっているわけではないので、鹿児島県立図書館の方にも問い合わせ、ご紹介いただいた橋口満著『鹿児島方言大辞典』<sup>12</sup>巻頭の「鹿児島方言の概観」を読んでみたのだが、いささか面食らった。ワ行五段活用の動詞「会う」「吸う」の連用形にそれぞれ「オッ」「スッ」がある。いずれも、標準語の「て」に相当する接続助詞「セエ」に続く形である。もっとも、「た」に続く形もそれぞれ「オ」「ス」になっていて、これらは、他の西日本地域の言葉のように「オータ」「スータ」と長音化しなかっただけだと考えることができ、その点、「オッセエ」「スッセエ」も標準語の促音便とは性質の違いがあるのではあるが、…。また、形容詞でも、意味上、標準語の「大きい」に相当する「フツカ」「フテ」の連

<sup>12</sup> 橋口満『鹿児島方言大辞典』上巻、高城書房、2004年。

用形が「フットカッセエ」「フテッセエ」のように促音便になっている。

これらの例示と説明に基づくなら、筆者の西日本オール・ウ音便という思い込みは、再検討を要することになる。ただ、それと同時に、頭に浮かんでくるのは、では、なぜ鹿児島の人を主人公とする上記二篇の小説にはこのような言い回しが全然出てこなかったのかという疑問である。ひょっとすると、微に入り細にわたるまで実際の方言に忠実な話し言葉を書いてしまうと、他の地域の読者には分かりにくいものとなるので、多くの読者の読みやすさに配慮し、読解上、無理のない限度の方言世界が設定されたのかもしれない。そして、そのように考えると、筆者の「グッドバイ」の長崎弁チェックは、やや度を越した「穿鑿」ということになるのかもしれない。

# 「中国人のお名前—蕭遙天著『中国人名的研究』の紹介」

## 発表要旨

柴田清継

蕭遙天という人に『中国人名的研究』（もちろん、「中国人名の研究」という意味）という著作があるので、紹介したい。

著者は1912年生まれで、姓名から察せられるとおり、いわゆる華人だが、主にマレーシアで生活した人で、教員生活のかたわら、多くの著作をものしている。

『中国人名的研究』は、1970年にマレーシアで出版された後、1979年には台湾で、1987年には中華人民共和国の国際文化出版公司から出版され、2007年には同じく中華人民共和国の新世界出版社から「中国人名研究 中国人名研究領域的開山之作」とタイトルを付け直して出版されている。版によって多少の差があるが、発表者が利用した国際文化出版公司版は、本文が270ページある。

新世界出版社のタイトルにある「開山之作」とは、パイオニア的作品という意味である。中国の人名をテーマにした、このくらいの分量の書物は従来なかったようなので、そのように謳ってもいいかもしれない。

本文は、上・中・下篇の三つの部分から構成されている。上篇（全86ページ）は「人名的縦面研究」（人名の通時的研究の意）で、殷代から元代までの各時代の命名に関する諸篇が並んでいる。中篇（全146ページ）は「人名的横面研究」（人名の共時的研究の意）で、名・字（あざな）・号等に関する諸問題や、名前と階級・職業、名前と思想潮流、名前と宗族思想等、様々なテーマが設定され、作者の蘊蓄が傾けられている。下篇（36ページ）は「人名的客観研究」で、収められているのは〈名前と歴史的事実の考証〉、〈姓名の忘失〉、〈姓名の省略〉、〈姓名の錯雑〉、〈同姓名〉、〈同名〉などをテーマにした文章である。（なお、ここでの「客観」という語の意味が発表者にはつ



かめない。)

国際文化出版公司版の「出版説明」には、本書は中国人名に関する上記のような諸問題を、様々な角度から系統的に探究し、こうした研究を中国の歴史・文化研究の切り口として位置付けることができている点で、新生面を開いており、また、内容が豊富で、文章は平易、とっつきやすいが中身は奥深く、「学術性」と「知識性」と「趣味性」(面白味の意)を兼ね備えており、文科系の専門研究者も一般の読者もひとしく裨益を受けられると評されているが、その通りだと言ってよいようにも思われる。

なお、著者の蕭遙天は、1990年に亡くなっている。その後、現在に至るまで、中国の人名に関する書物の出版は一定の数量に達している。蕭遙天の『中国人名的研究』に対する最終的な評価は、それらの書物にも目を通したうえで行いたい。

# 小学生向け教育番組に用いられる語彙分析

山岡 瑞希

## 0. 概要

日本語教育が必要な児童向けの教材作成の語彙表を作成するため、NHKの教育番組の国語科目の音声を書き起こし、語彙レベルを分析した。低学年向け番組5動画50分、中学年向け番組5動画75分を筆者が文字起こしし、その中に現れた単語を出現度順に並べ、表を作成した。

## 1. 語彙表作成の背景

近年、「留学生30万人計画」や新在留資格特定技能の新設により、在留外国人人数が増加傾向にある。しかし、2020年初頭から世界中に蔓延した新型コロナウイルスの影響により、2020年12月は在留外国人人数が8年ぶりの減少となった。外国人労働者の入国が激減した結果、前年2019年12月と比べ46,021人ももの減少だ。この数字は出入国在留管理庁の在留外国人統計の2019年と2020年12月の総数比較による。【1】

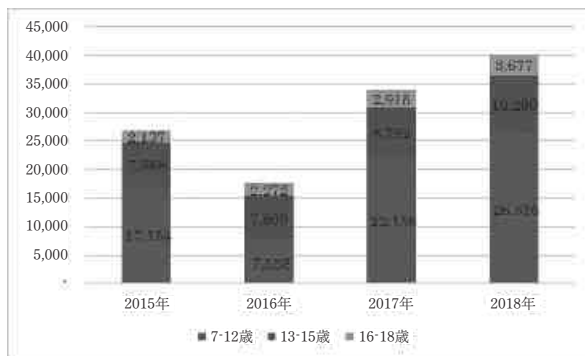
しかし、2021年9月末に緊急事態宣言が解除され、以降は旅行や飲食の活動が戻る兆しが見える。経済活動が活発になると同時に、コロナ禍前の課題である人手不足の問題が再び浮かび上がってくるため、外国人材の活用も企業の人材戦略として考慮することは、検討に値する。

同時に、日本語指導が必要な児童・生徒数の増加が問題視されている。日本語以外の言語が母語であり、日本語では日常会話が十分にできない、または日常会話ができてその学年相当の学習語彙が不足しているため、学習活動に支障をきたしている子どもである。2015年から2018年の年齢別在留外国人統計データによると、特に7歳から12歳の小学生の年代層が多く、2017年は22,156人、2018年では26,316人と年々増加傾向にある【図1】。親の就労などの理由により日本で生活する児童が多い中、インターナショナルス

クールや日本語教室に通わず、日本人が通う一般の学校に通うケースが増え、十分な日本語指導を受けられていないことが原因の一つだと考えられる。

このように、児童生徒が抱える日本語指導の問題に対し、各教育委員会は次のような措置を行っている。【2】 1つには児童生徒の母語を話せる教育サポーターの派遣、2つには日本語教師有資格者配置、他には担当教員の研修などがある。こうした数々の措置を講じるには、現場を指揮する担当教員が担う業務はケースバイケースとなり、それぞれの学校・児童の事情に応じた対応を迫られる。その結果、教員が多様化する子どもたちの指導計画を立てる。そして、その指導計画を実行することが求められる。

図1：日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数の推移【3】



これらは、日々の業務に加え日本語指導も行うということだ。つまり、ただでさえ多忙な学校及び教員が担うべき業務が累加する。一から指導計画を立てるのではなく、日本語指導に役立つ教育資源はないだろうか。

現在教育現場が抱えている問題を改善するべく、本研究は日本語指導が必要な児童向けの教材として、小学生向け教育番組の可能性を検討する。そのために、公立小学校の授業内で教材として利用される小学生向け教育番組では、その対象学年の一般の日本人児童が理解できる単語や表現で構成されていることと仮定し、NHK教育番組の字幕に基づいて番組内の文字を起こし、そのデータから語彙表を作成する。語彙表を作成するにあたり、日本語レベ

ルの分析も行う。

## 2. 小学生向け教育番組とは

### 2.1 番組の目的

本研究で文字起こしをした動画は、NHK 教育番組である。言語を扱うことから、16科目の中から国語を選んだ。他にも NHK 教育番組では以下の利点がある。

- ① 番組に対象学年が設定されていること。
- ② 日本の公共放送でも使われる教材であること。
- ③ ナレーション、多人数での掛け合いが多く、実生活での使用語彙を抽出できること。

この教育番組の先行研究として、「小学生向け教育番組の音声に用いられる語彙の予備調査」【4】がある。この調査は、日本語教育が必要な児童向けの教材作成の基礎データの提供を目的とし、NHK Eテレの小学生向け教育番組、つまり、本論で言う「NHK 教育番組」であり「NHK for School」の音声から語彙表を試作している。この語彙表は、書き言葉コーパスに基づく語彙表と比較して易しい単語が抽出できたと、方法論の有効性を評価している。この評価に基づき、先行研究同様に、NHK for School【5】にて公開されている小学生向け教育番組を対象とした。

NHK for School では、NHK Eテレで放送された全ての小・中・高向け学校放送番組を動画配信している。学年ごとに対応している16科目の番組を、教科書の目次や学習指導要領から検索することができる。

本研究では国語から、学年ごとの番組を探したところ「ことばドリル」と「ひょうたんからコトバ」が該当した。それぞれ1, 3, 5, 7, 9回の音声を筆者が文字起こしした。対象学年の異なる、これらの2番組それぞれの語彙表を作成し、比較することによって、学年ごとの語彙力の違いも考察できるだろう。

「ことばドリル」は、読み書きのスキルを楽しく身につけることが目的だ。小学校1, 2年生向けの10分番組である。毎回、子どもたちに身近な場面

を設定し、読み・書きで間違いやすい例を、ユーモアあふれるコント劇で紹介している。子どもたちが意識していない文字・語彙・文法・文章表現などの言語のルールに気付かせ、初歩の読み・書きを楽しく習得することができる。番組の回ごとのテーマ・狙い、文字数は以下の通りである【表1】。

表1 「ことばドリル」

タイトル	目的	文字数
第1回 「にているかな」	【表記】 ひらがな・カタカナの書き方・形を意識して、正しくきれいに書けるようにする。	1900
第3回 「カタカナでかくことば」	【表記】 ひらがなとカタカナを使い分けることで、文が読みやすく、伝わりやすくなることを実感する。	2545
第5回 「はんたいのことば」	【語彙】 さまざまな対義語を知ることで、語彙を増やすことができる。	2164
第7回 「ひとことという」と	【語彙】 ものごとを一言で、または逆に、くわしく表現する方法を知る。	2761
第9回 「おもったことと見たこと」	【形容詞】 語り手が主観的な色づけをすると、事実が正確に伝わらない。思ったことと見たことを区別して表現する。	3070

「ひょうたんからコトバ」は、子どもたちが“豊かな言葉の使い手”になることを目指した、小学校3～6年生向けの15分番組である。ことわざ・慣用句・故事成語などを取り上げ、これらの言葉の生まれた歴史や使い方を伝える。著名人のインタビュー形式でそれらの言葉を紹介するなど、故事成語を身近に感じる工夫が施されている。この番組の狙いは、学んだ言葉を普段の生活の中で使えるようになり、身の回りで使われる言葉に興味を持ち、子どもたちが新たな言葉を探し始めることである【表2】。

表2：「ひょうたんからコトバ」

タイトル	内容	文字数
第1回「がんばる」	・七転び八起き・背水の陣・笑いのオノマトペ	2733
第3回「書く」	・弘法筆を選ばず・推敲・「つかむ」と「にぎる」	2934

第5回「旅」	・かわいい子には旅をさせよ・呉越同舟・日本全国「ありがとう」の旅	3100
第7回「うっかり！」	・猿も木から落ちる・蛇足・2つ重なった間違い言葉	3071
第9回「びっくり！」	・寝耳に水・青天の霹靂・江戸の言葉遊び	3133

## 2.2 番組の語彙

### 2.2.1 抽出方法

文字起こししたデータを、Web 茶まめ【6】を利用して単語を抽出する。Web 茶まめとは複雑な計算機における形態素解析実行環境の用意を必要とせず、容易に複数の辞書を切り替えて形態素解析が可能なサポートソフトウェアである【7】。サーバにインストールされた MeCab に、文字列を入力し形態素解析を行い、単語に分割した。解析した文章の時代に合わせて、「現代」「中古」「上代」などが選択できるが、本研究では「現代語話し言葉」を利用する。抽出した単語の中から、「小学生向け教育番組の音声に用いられる語彙の予備調査」【4】「大規模コーパスに基づく日本語教育語彙表の作成」【8】と同様に、助詞、助動詞、記号、接頭辞、接尾辞、固有名詞、指示代名詞、補助記号を除外し、頻出順に並べた。

### 2.2.2 日本語レベル

日本語能力試験とは、1984年にできた、日本語を母語としない者を対象に日本語能力を測定し認定するための試験である。日本語学習者にとって学習の一つの到達目標を提供するものとして、学習意欲の向上に資している。それと共に、日本語学習者の日本語能力を客観的に測定し、日本語学習者に対する効果的な教育の在り方を検討する基本的な資料としても、極めて重要なものである【9】。

日本語能力試験は2010年に改定され、問題形式の変更や新しい問題形式が追加された。旧試験の1級、2級、3級、4級は今の試験のN1、N2、N4、N5のレベルに相応する。新しく設定されたN3については、旧試験

の2級と3級の合否判定の水準における日本語能力レベルを分析し、この間にN3の合格点が収まるように設定された。

本研究では、リーディング・チュウ太の語彙チェッカー【10】を用いて、得られた語彙の日本語能力試験レベルを分析する。出題基準に基づいて単語の難易度を判定するシステムを利用し、N1・N2・N3・N4・N5・級外に分けて調査した。N2・N3はリーディング・チュウ太の区分による。日本語能力試験の認定目安【11】によると、N4とN5が「基本的」であることから、N4とN5の出題単語を易しい単語として見なすことにした【表3】。

表3：日本語能力試験 認定の目安

レベル	認定の目安
N1	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる
N2	日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語を理解することができる
N3	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる
N4	基本的な日本語を理解することができる
N5	基本的な日本語をある程度理解することができる

### 3. 日本語レベルの分析

それぞれの語彙表の上位50単語を4章に掲載する。更に、得られた単語のレベルが小学生向けの易しいものであるかどうかを、日本語能力試験の出題基準に基づいて評価する。低学年向け番組「ことばドリル」、中学年向け番組「ひょうたんからコトバ」から抽出されたデータを表4に示す。

また、助詞や助動詞、指示代名詞、接頭辞などを除いた語彙数は低学年向け2734語、中学年向けは3345語であり、そのうち2回以上登場する語彙は低学年向け313語、中学年向け439語であった。2回以上登場する語彙の日本語能力試験レベルを比較すると、最も基本的なレベルであるN5は低学年向けに頻出しており、「日常的」であるN2とN3は中学年向けに頻出していることが分かる。

表4：語彙の日本語能力試験レベル（2回以上登場する語彙に限る）

レベル	低学年向け番組		中学年向け番組	
	回数	割合	回数	割合
N 5	118	<b>37.7%</b>	140	31.9%
N 4	57	18.2%	85	<b>19.4%</b>
N 2 N 3	68	21.7%	135	<b>30.8%</b>
N 1	22	<b>7.0%</b>	25	5.7%
級外	48	<b>15.3%</b>	54	12.3%
	313	100%	439	100%

以上の通り、先行研究では書き言葉コーパスの語彙表との比較から、小学生向け番組だと易しい単語が抽出できることが証明されていたが、本論の日本語能力試験の語彙との比較により、番組の対象学年別に、日本語能力検定試験レベルの詳細を明らかにすることができた。

#### 4. 語彙表

順位	低学年向け番組 「ことばドリル」			中学年向け番組 「ひょうたんからコトバ」		
	語	度数	レベル	語	度数	レベル
1	言う	81	N 5	する	129	N 5
2	何	73	N 5	言う	101	N 5
3	なる	71	N 5	事	71	N 4
4	無い	57	N 5	いる	68	N 5
5	事	51	N 4	なる	43	N 5
6	いる	49	N 5	時	42	N 5
7	書く	46	N 5	ある	41	N 5
8	言葉	43	N 5	無い	39	N 5
9	分かる	32	N 5	皆	34	N 5
10	良い	27	N 5	書く	33	N 5
11	反対	26	N 4	良い	32	N 5
12	痛い	21	N 5	行く	26	N 5
13	ドリル	21	N 1	人	24	N 5
14	カタカナ	21	N 5	言葉	23	N 5
15	顔	20	N 5	見る	22	N 5



16	形	19	N 4	やる	21	N 5
17	来る	18	N 5	日	21	N 5
18	ある	17	N 2 N 3	ことわざ	21	N 2 N 3
19	下さる	17	N 5	意味	20	N 5
20	目	16	N 5	旅	20	N 2 N 3
21	見る	15	N 5	失敗	17	N 4
22	もう	15	N 5	頑張る	16	N 4
23	皆	14	N 5	使う	16	N 5
24	人	13	N 5	しまう	16	N 4
25	一言	13	N 2 N 3	思う	15	N 4
26	雪男	13	級外	今	14	N 5
27	犯人	13	N 2 N 3	掴む	14	N 2 N 3
28	誰	12	N 5	握る	14	N 2 N 3
29	間違う	12	N 2 N 3	中	13	N 5
30	ハンバーグ	12	N 4	読む	13	N 5
31	正解	12	N 1	落ちる	13	N 4
32	一寸	12	N 5	びっくり	13	N 4
33	色	12	N 5	今日	13	N 5
34	思う	12	N 4	年	12	N 5
35	隊長	11	級外	来る	12	N 1
36	メニュー	11	N 2 N 3	くれる	12	N 4
37	カレー	11	N 5	筆	12	N 2 N 3
38	丸い	11	N 5	痛い	12	N 5
39	君	11	N 4	分かる	11	N 5
40	きのこ	10	級外	前	11	N 5
41	くれる	10	N 4	水	11	N 5
42	嫌	10	N 5	男	11	N 5
43	挑戦	10	N 1	転ぶ	11	N 2 N 3
44	ホーム ページ	10	級外	出来る	11	N 5
45	ひらがな	10	N 5	声	11	N 5
46	やる	10	N 5	推敲	11	級外
47	説明	9	N 4	押す	11	N 1
48	部門	9	N 1	木	11	N 5

小学生向け教育番組に用いられる語彙分析

49	合言葉	9	級外	恰好	10	N 4
50	オクラ	9	級外	気	10	N 4

度数順語彙表

順位	語	度数	順位	語	度数	順位	語	度数
1	言う	182	18	やる	31	35	しまう	16
2	する	129	19	来る	30	36	使う	16
3	事	122	20	思う	27	37	目	16
4	いる	117	21	行く	26	38	もう	15
5	なる	114	22	反対	26	39	今	14
6	無い	96	23	くれる	22	40	掴む	14
7	書く	79	24	カタカナ	21	41	握る	14
8	何	73	25	ことわざ	21	42	落ちる	13
9	言葉	66	26	ドリル	21	43	今日	13
10	良い	59	27	日	21	44	中	13
11	ある	58	28	意味	20	45	犯人	13
12	皆	48	29	顔	20	46	びっくり	13
13	分かる	43	30	旅	20	47	一言	13
14	時	42	31	形	19	48	雪男	13
15	人	37	32	下さる	17	49	読む	13
16	見る	37	33	失敗	17	50	一寸	12
17	痛い	33	34	頑張る	16			

参考文献

【1】

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20190&month=24101212&tclass1=000001060399>

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20190&month=24101212&tclass1=000001060399&tclass2val=0> (2021年11月4日閲覧)

**【 2 】**

<https://www.pref.osaka.lg.jp/kotogakko/nihongo/index.html> (2022年 1 月 7 日 閲覧)

**【 3 】**

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20150&month=24101212&tclass1=000001060399>

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20160&month=24101212&tclass1=000001060399>

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20170&month=24101212&tclass1=000001060399>

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=24101212&tclass1=000001060399> (2020年12月26日閲覧)

**【 4 】**

「小学生向け教育番組の音声にもちいられる語彙の予備調査」(2020) 浅井優介、北村達也、河村よし子『甲南大学紀要・知能情報学編13巻』pp.67-75

**【 5 】**

<https://www.nhk.or.jp/school/> (2021年10月15日閲覧)

**【 6 】**

<https://chamame.ninjal.ac.jp/> (2021年11月13日閲覧)

**【 7 】**

「歴史的資料を対象とした複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』」(2015) 堤智昭、小木曾智信『じんもんこん2015論文集 vol.2015』pp.179-184

**【 8 】**

「大規模コーパスに基づく日本語教育語彙表の作成」(2015) 本田ゆかり、

東京外国語大学博士論文（甲第208号）

【9】

<https://www.jlpt.jp/index.html>（2021年10月23日閲覧）

【10】

<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>（2021年11月21日閲覧）

【11】

<https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>（2022年1月3日閲覧）



# 言語文化研究所活動の概要 2021-2022

## 1. 刊行物等

- (1) 『言語文化研究所年報』31号

論文4編を掲載して刊行した。

- (2) 『オトナのための日本語塾レポート集2021』

LC 倶楽部会員が年間5回の勉強会と話し合いを経て、各自の興味あるテーマをレポートとして仕上げたもの。今年度は3名のレポート、4名による9件の日本語観察記録を掲載して刊行した。

- (3) 研究レポート (LC りぽーと)

第47号「SNS と関西方言－大学生の方言使用実態とその意識－」

大学生が SNS 使用時に、方言を意識的に使うことがあるのか、また、意識的に使わないことがあるのかについて、その実態と意識とを考察した。

第48号「LINE 会話の終わり方・抜け方－大学生はどうやって LINE での会話を終わらせているか－」大学生の LINE 会話の終結方法について、会話を終わらせる際に気を遣っているのかどうか、また、その終わらせ方をどのように行っているのか、そこに工夫や暗黙の了解のようなものがあるのかどうかについて、その実態をまとめた。

- (4) メディア紹介

朝日新聞 (2021年11月11日掲載) で、研究レポート (LC りぽーと) 48号が紹介された

## 2. 「言語文化研究所フォーラム」(大学間教育研究連携プロジェクト)

日 時：2021年12月25日 (土) 午後1時30分～3時30分

司 会：影山尚之 (武庫川女子大学言語文化研究所所長)

講 師：玉井 暉 (武庫川女子大学言語文化研究所研究員)

渡邊隆信 (神戸大学教授 武庫川女子大学言語文化研究所研究員)

テーマ：「言語文化と言語教育－文章読本を考える－」

発表タイトル：玉井 暲「文章読本の系譜」

渡邊隆信「及川平治における動的教育論と綴り方教育」

コメンテーター：山崎洋子（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

岸本千秋（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

参加者：17名

### 3. 「言語文化セミナー」

日 時：2021年7月24日（土）午後2時00分～4時00分

講 師：玉井 暲（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

テーマ：「ラフカディオ・ハーンと浦島伝説」

概 要：（玉井 暲講師より）

イギリスの作家ラフカディオ・ハーンは1890年（明治23年）に来日し、日本女性と知りあい、結婚し、日本に帰化した。日本名は小泉八雲という。ハーンは日本のおとぎ話が気に入り、特に「浦島太郎」の伝説に魅了された。自分でも「浦島太郎物語」を書いて出版している。この英国人作家は浦島伝説のどこに関心をもったのか、ハーン版の「浦島太郎物語」を読みながら、その理由と意味を考えてみたい。

参加者：48名

### 4. 第6回「武庫川女子大学言語文化シンポジウム」

日 時：2022年3月12日（土）午後1時30分～3時30分

テーマ：「食と日本語」

講 師：影山尚之（武庫川女子大学言語文化研究所所長）

佐竹秀雄氏（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

岸本千秋（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

発表タイトル：影山尚之「食べる万葉集」

佐竹秀雄「生きている食のことば」

岸本千秋「消えるか、残るか、食べ物の言葉」

参加者：52名

## 5. 第12回「ことばのサロン」

日 時：2021年11月20日（土）午後1時30分～3時30分

講 師：佐竹秀雄氏（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

テーマ：「タメ口と敬語の間」

概 要：（佐竹秀雄講師より）

敬語の使い方はやさしくありません。しかし、家庭内や親しい人の間では、敬語を使う必要はないはずです。そこで話される言葉はタメ口と同じなのでしょうか。ただ、タメ口は、かなり失礼な印象が強いためか、評判はよくありません。

では、家庭内や親しい人の間では、タメ口がダメならどんな言葉遣いがいいのでしょうか。タメ口でもなく、強い敬語もない、理想的なものとはどんな言葉遣いなのでしょう。

ふだんの言葉遣いのあり方について、皆さんと一緒に考える、それが今回のテーマです。

参加者：18名

## 6. 「オトナのための日本語塾」

概 要：2015年度からの開講である。「ことばのサロン」を体験したLC 倶楽部会員たちが、自分の興味あることがらについて「自主的に調べ」、それを「まとめて発表する」ことを目標とするものである。

開催日：年間5回、各回10：30～12：30

〈2021年度〉2021年6月12日（土）、同年7月17日（土）、同年10月2日（土）、同年12月18日（土）、2022年2月19日（土）

成 果：『オトナのための日本語塾レポート集2021』（執筆者5名）



## 7. 「日本語相談室」

日本語学を専門とする研究員が日本語表現全般について相談を受け付ける。相談できる内容：レポート作成、論文作成の際における日本語表現全般について。

対 象：本学の学部生、大学院生・留学生、若手研究者。

## 8. LC 倶楽部会員から研究所歌の寄贈

竹腰純氏と松本卓也氏から、「武庫川女子大学言語文化研究所歌」(作詞：竹腰純、作曲：松本卓也)を寄贈していただいた。ここに歌詞と楽譜を掲載し、お二人に感謝を申し上げる。

《歌詞》

武庫川の 清き流れに 棹をさし 理想の未来切り開く 絆強める  
言の葉に 愛する友と 巡り合う ああ 我らの 言語文化研究所

Score

## 武庫川女子大学言語文化研究所歌

作詞：竹腰 純  
作曲：松本卓也

Moderato (♩=80) D

むこがわのきよき

4 A G  
ながれに— さおをさしりそう

8 D A G  
の みらいきりひらくきずな— つよめ

11 A D A/C# Bm G  
る— ことのはにあいするともとめぐ—

15 A D  
— りあう— あ— ああ

19 A G A D  
われらのげんご— ぶんかけんきゅうしょ—

23

C

## 9. 事務報告

### (1) 組織

所 長：影山 尚之  
研 究 員：岸本 千秋  
研 究 員：佐竹 秀雄  
研 究 員：玉井 暲  
研 究 員：設樂 馨  
研 究 員：富永 英夫  
研 究 員：福本由紀子  
研 究 員：藤井 達矢  
研 究 員：柴田 清繼  
研 究 員：山崎 洋子  
囑託研究員：渡邊 隆信  
囑託研究員：川地亜弥子  
事 務 職 員：向井 弥生

## 執筆者紹介

- 影山 尚之 本学言語文化研究所所長・文学部日本語日本文学科  
岸本 千秋 本学言語文化研究所助教  
山崎 洋子 本学言語文化研究所研究員  
柴田 清継 本学言語文化研究所研究員  
山岡 瑞希 本学文学部日本語日本文学科4年

## 編集後記

### ◆お詫び。

『言語文化研究所年報』の月号第32号に記載されている柴田清継先生のご論考「中国人のお名前——蕭遙天著『中国人名的研究』の紹介」は、言語文化研究所シンポジウム：学院創立80周年記念シンポジウム「ネーミングの言語文化」（2020年2月14日開催）にて、柴田清継先生が発表された内容の要旨です。本来ならば、『言語文化研究所年報』の第30号に掲載すべきところ、こちらの編集上の手違いにより脱落してしまいました。まことに申し訳ございませんでした。柴田先生には深くお詫び申し上げます。ここに、先生のご論考を、遅まきながら掲載させていただいた次第です。（玉井 暲）

◆『言語文化研究所年報』第32号をお届けいたします。月号は、2014年4月から2020年3月まで言語文化研究所長として、研究所の発展にご尽力くださった、玉井暲先生の研究所長ご退任記念号としての発行となります。※執筆者の山岡瑞希さん（本学文学部日本語日本文学科4年）は設楽馨研究員の推薦によります。※LC 倶楽部会員から「武庫川女子大学言語文化研究所歌」（作詞：竹腰純さん、作曲：松本卓也さん）をいただいたことは、大変ありがたく当研究所への愛を感じています。※編集に時間がかかり、発行が遅くなってしまいましたことは、まことに申し訳なく存じます。ご高覧の上、お気付きの点、著者らへのご意見などをお寄せいただければ幸いに存じます。

（岸本 千秋）

2022年3月31日 印刷  
2022年3月31日 発行

編集者

武庫川女子大学  
言語文化研究所  
電話 0798-45-3536 (直通)

発行者

武庫川女子大学  
西宮市池開町6番46号

(非売品)

印刷所

大和出版印刷株式会社  
神戸市東灘区向洋町東2-7-2

